





## 第5章

---

# 家庭における ジェンダー関係の変化

私達の村では、女ができることはわずかです。彼女達の役割は農作業をし、ジャングルから燃料となる木を運び、子供の世話をすることだけなのです。

—インドのある村の男性, *India 1997d*

娘が10人いても息子が1人もいなければ、子供が全くいないのと同じことです。

—ベトナムの貧しい女性, *Vietnam 1999a*

シスターよ。叩くことをやめたら、女は忠実でなくなるでしょう。たとえ女が忠実でも、叩き続けなければ、女は言うことを聞かなくなるのです。

—バングラデシュの男性, *Bangladesh 1996*

貧しい人々の生活において、最も重要な制度の1つは家庭である。<sup>1</sup> 家庭とは、個人が資源を得るために協力し合い、競争し合う社会の基本単位である。家庭はまた、個人が社会規範や価値観、権力、特権、名誉に直面し、これらを継承していく主要な場所でもある。家庭内で行使されるジェンダーの規範は、社会というさらに大きな制度の中で強化される。カビアーによれば、「ジェンダーの関係が現れる重要な社会制度の1つに家庭が挙げられるが、それは家庭内に限定されるものではなく、むしろ幅広い制度の中で作られ、変えられ、議論される」(Kabeer 1997)。言い換えれば、ジェンダーの問題とは、家庭全体や家族の一員それぞれの単なる物語ではなく、より大きな制度によって形成され、家族の1人1人が新たなジェンダーの規範の形成に関与しているということなのである。<sup>2</sup>

本章では、ジェンダーにより生ずる不安について述べることにする。制度としての家庭は、流動的であり、常に変化している。これまで、(いくつか例外もあるが、)大規模な経済的・社会的・政治的再編成は、貧しい人々に経済活動の機会をもたらすものとしてとらえられてこなかった。経済的な窮迫が高まる中、世界の多くの地域において、男性は伝統的な生活を失い、女性は家事を続けながら、補完的に収入を獲得できるような仕事に就くことを強いられてきたのである。こうした変化は、貧しい人々の家庭内における男女の差別化、ジェンダーにより生ずる権力、及びジェンダーの関係という中核的な価値基準にまで及び、「良き女性像」、「良き男性像」に対する基準を揺るがせている。こうした価値基準と男女の関係は、沈黙と苦痛、暴力の中で壊され、試され、再度取り決められているのである。ジェンダーによる役割が大きく変化しているにも関わらず、伝統的なジェンダー規範が深く根づいているため、家族は日常生活の中で、往々にして矛盾した要求を満たそうと、苦しむことになる。

このような切迫した状態は家族全員に影響を及ぼしている。外部の支援が得られない中、これらの変化がジェンダーにおける平等な関係を家庭に本当にもたすのか、また虐待、飲酒、別居、離婚によるトラウマ、家庭の崩壊を回避するものなのか、定かではない。貧困削減戦略の要素として取り上げられていないが、PPAでは貧しい人々の家庭内における沈黙のトラウマを報告している。

調査を実施した国々では、女性は、主婦、家庭をやりくりする者、子供や夫の健康に責任を持つ者と周囲から見なされ、自分自身もそのように認識している。またPPAの報告は、社会的・経済的環境の変化によって、自身の役割が侵害されても、稼ぎ手や意思決定者としてのアイデンティティに固執する男性の性質にも触れている。このような社会的に定義づけられた男女の役割には、無理があるだけでなく、現実と全く矛盾している場合もある。これこそが今日、貧困家庭に特有のストレスを生み出している原因なのである。

PPAの報告によると、家庭内の男女が、それぞれの方法で長期間に渡る激しいストレスに適応しようとしている。男性は挫折感に打ちひしがれる傾向にあるようだが、女性は自尊心を捨て、必死に行動を起こす。男性が失業者や不完全雇用者である場合、女性は家族を養うために、高い危険性を伴う低賃金で低地位の職に就く。男性の中には、家庭の収入に十分な貢献ができないために、家庭を重い負担だと感じてしまう人もいる。また、他方で、家族を養う者、そして家長としての自分に異議を示されたような気持ちになり、しばしば怒りを覚え、欲求不満に陥る男性もいる。これに対して女性は、収入獲得の機会は相変わらず少ないままであるが、家族の世話をし続け、不安定ではあるが、今まで得ることのできなかった自信を得るようになる。これらの主なパターンは図5.1で表されている。

スワジランドのPPAは次のように記述している。「女性と男性は、それぞれ異なった形で貧困という苦痛を経験する。男性は、家畜の喪失や、家庭の基本的なニーズを満たすために(妻が)稼いでくるインフォーマルセクターからの収入に対する依存が増すことによって、彼らの社会的地位や、自尊心、一家の大黒柱としての経済的役割が脅かされる。返済不可能な借金や、単に妻や子供を養えなくなったことから地域社会を離れ、家族を捨てる男性の事例が多く存在する」という(Swaziland 1997)。

ジェンダー・アイデンティティが変化しつつある家庭では、どのような結果が生じるのだろうか。家族が協力し合い、アイデンティティの変化に上手く対処している

図 5.1 経済的崩壊とジェンダーにより生ずる不安

	男性	女性
伝統的アイデンティティ	稼ぎ手	世話役
役割	収入を稼ぐ者	母親、妻
反応 (男性の失業に対する)	ストレス、屈辱感、飲酒、 薬物、暴力	圧迫感、葛藤、怒り、絶望、 憂鬱さ
適応の方法	崩壊、挫折	行動を取る；リスクのある 低収入、低地位の仕事を探す、 家族の面倒を見る
結果	家庭内で不要な男性、破滅、 家庭崩壊	今まで得ることのできなかった 自信、脆弱性、家庭崩壊
介入の方法	雇用機会の創出	保護、組織化、雇用
対話	男性・女性のアイデンティティ	男性・女性のアイデンティティ

家庭もいくつか存在する。しかしその他の家庭では、暴力や家庭崩壊、離婚という結果に終わっている。

本章は、PPAを通じて、貧しい女性や貧しい男性の声から得たジェンダーに関する傾向、因果関係及び関連性を基に構成されている。まず、PPAの分析によって調査結果が明らかになったジェンダーの問題を理解するためのカギとなる概念についていくつか論じる。次に、伝統的な男女間の規範、ジェンダー・アイデンティティ及び分業、さらに大規模な経済的・政治的变化が男女の関係に与える影響や、男女の変わりつつある役割に焦点を当てる。最後に、家庭内のジェンダーによる役割や権利が、より大きな社会制度・機構にどのような影響を与え、また逆にいかに影響を受けているのかを提示するため、教育と所有権という2つの分野に関するケーススタディを紹介する。しかし、本章では、ある不均衡が目立って見られる。それは、女性の生活に比べて男性の生活についての情報がほとんど得られていないことである。そのため、男性に関する記述は、意義深いだが、非常に少ない。また、使用する専門用語は変わったが、開発における考え方では、開発における女性という枠組みの中で捉えられることが、まだ現実として非常に多いのである。<sup>3</sup>

## ジェンダーによる不平等の根源

男性は全てを所有しています。なぜなら生まれた時からそうだからです。

—タンザニアのカゲラ・カナジ村, Tanzania 1997

あらゆる観点から、女性はしばしば、自分達は男性に従属する立場にあると認識している。ほとんどの社会で女性達は、社会的、文化的及び経済的に男性に依存している。女性に対する暴力は、男性優位を示す極端な表現行為であり、ダビエスによれば、「女性に対する人権侵害の中で最も扱いが難しい問題の1つ」である(Davies 1994)。

多くの社会に家庭内暴力が現存しているという事実は、それが、単にある個人に特有の問題が原因なのではなく、社会的・経済的に不平等な男女関係をつくり出す社会構造とより深遠に関連しているということを、提示している。ジェンダーに起因する暴力の根源は、女性の選択を制限し、男性への依存を高める不平等な権力関係にある。<sup>4</sup> 例えばカメルーンでは、支配や依存状態は様々な形で続いている。夫や父親、又は兄弟の許可を得なければ、女性が外出できない地域もある。さらに、「女性の夫や兄弟は、彼女の銀行口座へのアクセスが可能であり、彼女の財産に関する情報が得られるのに対し、その逆はありえない。ある農民女性達に、

どうして夫が彼女達のお金を使うことが出来るのかを尋ねると、彼女達は笑いながら、『分かりません』と答えた」という(Cameroon 1995)。ダビエスは、「女性が社会的、政治的及び経済的に男性に依存することで、男性の女性に対する暴力が今後も続いていく構造が作り出されている」と主張している(Davies 1994)。家庭内暴力が広まっているという現実があるにも関わらず、国家機関や国際機構は、この問題を社会的、政治的に「触れてはいけない問題」としているふしがある。<sup>5</sup>タンザニアで実施されたPPAは、「妻への暴力は、公で議論することのできない家庭内の問題である。時にその原因は、女性の無礼で横柄な態度にあり、そのことに対してしつけをするために夫が暴力をふるう場合もある。しかし、中には単に圧制的で、妻を虐待することを好んでいるだけの男性もいる」と報告している(Tanzania 1997)。残念ながら、男性による女性に対する暴力への男性自身の反応は、PPAではほとんど報告されていない。

男性は、自らの権威が脅かされそうになると、ストレスを感じ、暴力や脅しという行為で女性を力づくで支配しようとする傾向がある。さらに、一般的な社会規範や構造から生み出されるこの暴力は、被害者によって受け入れられ、常識的なことと捉えられてしまうことさえある。ルペシンヘやルビオ(Rupesinghe and Rubio 1994)は、「構造的暴力の特色で顕著なのは、被害者自身も、黙認又は対抗という態度を取りながら、その構造の一部としての役割を演じている点である。被害者が、これら2つの態度のどちらを取るか、私達があらかじめ決定することはできない。なぜなら、他にも要因が存在する中で、被害者がこうした支配的な文化を受け入れてきた程度、又はその文化に対して積み上げてきた批判の程度によるからである」と主張している。ジャマイカのPPAは、「女性が自らの体験について公然と話せると感じた時、家庭内で日々繰り返される暴力行為や、その恐怖感、家に閉じ込められる閉塞感といったものが明らかになる」と報告している(Jamaica 1997)。

## 伝統的なジェンダー規範

女性は、めんどりのように、おんどりが鳴いて夜明けを知らせるのを待っている。

—ガーナのことわざ, Ghana 1995a

おんどりはひよこの世話の仕方を知らないが、自分自身を養っていく方法だけは知っている。

—ジャマイカのことわざ, Jamaica 1997

マーシャルによれば、規範とは、文化的に望ましく適切で、社会で共通して期待されている振る舞いのことであり、役割とは、それぞれの社会的立場に付随する一連の規範である(Marshall 1994)。社会規範は、大衆文化、ラジオ、テレビ、伝統的な芸術様式やことわざ、物語、風習、法、及び日々の習慣を通して強化される。「女兒が生まれるのは、前世で悪事を働いたからである」や、インドの「良い女の子は沈黙の中で苦しむ」といったよく知られていることわざに見られるように、文化的規範は深く社会に根付いており、事実であると理解されている。一般に、ウガンダの男性が述べているように、「女性は劣った性であると見られている」(Uganda 1998)。

当然のことと思われる女性の「劣性」は、家庭内や一般社会の中での差別や虐待を正当化するために利用されている。力の不平等は、伝統的、現代的な法や制度上の慣習に反映され、一層強化される。アガルワルによれば、司法当局、社会及び市場といった家庭外における女性の交渉力は、家庭内における交渉力と密接に関連している(Agarwal 1997)。自分達には相続権がない、もしくは限られている、と多くの国の女性達は説明する。仮に相続権を持っていたとして、その権利を主張すると、彼女達は自らの生活基盤となっている血縁関係から追放される危険にさらされてしまうのである。

男性やその家族は、離婚するしないに関わらず、自分の宝石さえも持っていくことを許さずに、女性を家から追放することができる。これはまさに社会の不平等を反映している。女性は、離婚されることの恐怖から、自己主張を控える。インド北部において、「女性は、結婚のためにカゴに乗って実家を去り、棺の中に入って実家に帰ってくる」という考えは、多くのボンベイ映画の基本的なあらすじになっている。

バングラデシュにおける別の調査では、社会的・経済的な選択の余地がほとんどない状況では、沈黙することが、女性にとっての自衛手段の1つである、と報告されている。バングラデシュに住むある女性は、「夫と言い合いになると、彼はいつも私を殴ります。私は口ごたえしないようにしています。なぜなら彼に捨てられてしまうかもしれないからです。私には行くところなどありません。私に重大な落ち度がない限り、普段は、彼は私を叩きません」と話している(Schuler et al. 1998)。

ルワンダでの大量虐殺により未亡人となったある女性は、元夫の土地で、牛馬のように働かされている述べている。彼女は加えて、「私の夫の両親はまるで他人です。それでも、いつか彼らは自分達の土地を離れ、私の土地を要求するかもしれませんが」と語っている(Rwanda 1998)。

同様に、ケニアの女性達は、家庭用品を持っていくことさえも許されずに、夫に家から追い出されたと述べている。ウクライナ、ラトビア及びマケドニアの女性達は、当局が捜査をしてくれないので、レイプの被害届を出しても無駄だと言ってい

る。世界中のあらゆる地域の女性達は、虐待や貧困生活への恐怖に直面した時、頼れるものはほとんどないと述べている。

多くの女性が組織を作り、行動を起こし、抗議する一方で、<sup>6</sup> 貧しい女性達に対する分析調査では、黙り込む、間接的に主張するなどの、彼女達なりに自分達で解決策を講じているという報告もある。また、女性達は、家庭の中で自分よりも権力の強い人と交渉するために、伝統的・文化的に適切な方法を間接的なおかつ控えめに用いることによって、自らの生活を改善しようと努めている。南アフリカの貧しい女性達は、男性を拒絶するよりも操ることで、より多くのものを得ることができる、と感じている。彼女達は「正しい男性」を選ぶ「コツ」や、男女関係の中で自分自身をうまく主張する「コツ」について話す。週末に、彼女達に賃金を手渡すよう夫を仕向けることに成功するのは、大きな成果だとみなされていた。ある女性は、「こうすれば、女性が責任を持ってお金の使い道を決めることができる」と述べている (South Africa 1995)。

社会規範はそう簡単に变化するものではない。ジェンダーによる役割が変化しているとはいえ、根強い社会規範により、性別によるアイデンティティーやそれに伴う期待が男性と女性に教え込まれている。これらの規範は、個人、家庭及び地域社会が生き残る上で、1つの大きな障壁を作り上げている。伝統的なジェンダー規範や役割分担が、貧困を永続させる要因であり続けることは、PPAの調査結果からも明らかである。

## ジェンダー・アイデンティティ

女性は結婚の申し込み以外なら何でもできます。男性が食器を洗ったり、料理や掃除をするべきでないように、女性が男性に結婚を申し込むべきではありません。もし男性が台所に立っているところを誰かに目撃されたら、その夫婦は信頼されなくなるでしょう。

—ウガンダの高齢の女性, Uganda 1998

私達の文化では、女性は萎縮しがちです。男性が常に指導者であり、最終的に彼らの意見が優先されるからです。

—南アフリカで実施されたPPAの報告書より, South Africa 1998

家事はたいいてい男女分業で、次のように分担されます。女性は炊事、掃除、洗濯をし、水がない所では水を運びます。男性は火を灯し、家を修繕し、必要があれば子供と共に妻を助けるのです。

—マケドニアで実施されたPPAの報告書より, Macedonia 1998

アイデンティティとは、自分自身が何であるか自覚することである。それは、社会上の相違に基づく人間関係を表す概念である。アイデンティティには、年齢や人種のように固定されたものもあれば、経歴や居住地、社会ネットワークへの参加の程度のように、変化するものもある。そして、アイデンティティは、自己の利益のため戦略的かつ実用的に作り上げ、又は、変化させ、そして利用することができるのである。

アケルロフとクラントン(Akerlof and Kranton 1999)は、心理学的及び社会学的なアイデンティティを経済活動と関連づけている。「男性の典型的な特徴は、競争的で取得本能があり、自主的で独立心が強く、挑戦的で、個人の所有物に関心を持つ点である。それに比べて女性は通常、協力的で面倒見がよく、世話好きで、結合性があり、グループ志向で、公共財に関心を持っている」という。このように、ジェンダー・アイデンティティは、経済上の成果をも形成するという役割を担っている。例えばスワジランドでは、「仕事を探す時に、夫或いはその代理人として最も近くにいる男性の親戚の許可が必要である、と農村部の地域社会に居住するほとんどの女性が報告している。多くの場合、野菜や工芸品の販売が、文化的に唯一認められた経済活動であり、その結果、この仕事を求める競争が非常に激しくなった。農村部の女性の多くは、夫が働きに出ることを許可しないため貧しいのだ、と述べた」(Swaziland 1997)。

世界各地のPPAのデータで一貫しているのは、男性の第一義的な役割は稼ぎ手や意思決定者であることで、女性の第一義的な役割は家族の世話をすることである。さらに、都市と農村という相違は、男女の役割に関する基本的な規範に何らの影響も与えない。例えばパナマでは、「都市では、男の子が運動場への外出を許可されている一方で、女の子は家で宿題をし、テレビを見て、洗いや床掃除など家事を手伝う。農村部の状況もこれとほぼ同じである。女の子は母親を手伝って床を掃除し、野菜農園で働く。成人すると、農村部の地域社会に住む男性は畑に行き、なたで草刈りをするなどの仕事をする。しかし、女性の炊事は仕事とは見なされない。女性は収穫を手伝うが、種まきはしない」という(Panama 1998)。

女性は家族の面倒を見る者として見なされ、また自分自身もそう捉えている。女性は子供や夫の保健・医療、教育、健康に対する責任を負っている。このようなアイデンティティの概念は、ジェンダーに基づく分業を通じて、家庭内での力関係や仕事内容に影響を与えている。ベトナムのPPAは、ジェンダーによる役割を簡潔に定義している。「妻が子供の世話や買い物など、家計に対して責任を負う一方で、夫は投資や住宅に関して重大な決定を下す」(Vietnam 1996)。ウガンダの女性は、男性が女性の収入を管理しているため、女性による家庭の所得へのアクセスが制限されている、と述べている。これは、「女性は収入の計画を立て、男性は

支出の計画を立てる」ということわざからも明らかである(Uganda 1998)。多くの社会で女性は、家事を当然の義務であると感じている。インドでは、「女性の家事の捉え方は、伝統的なジェンダーに基づく分業という厳格な考え方の影響を受けている。女性は、家中の掃除をすることが当然の義務とされ、彼女達自身、1度結婚し別の家族に入ったなら、家事をすることは義務だと考えているようだ。ドゥッカシラとサルターパリに住む女性は、結婚の真の目的は、家事を行うための労働力を新たに追加することである、と述べている」(India 1998a)。

カメルーンで実施されたPPAは、伝統的なアイデンティティ、規範、役割、そして振舞いは、「文化的・社会的に貧困を継続させる決定的要因」(Cameroon 1995)であり続けるが、伝統とは変化するものである明示している。経済的な苦難は、貧しい人々に対して新しい環境に順応することを強いる。そして、順応していくことによって、目に見えたり、見えない形で、家庭内のジェンダーによる役割が大きく変化する。

## 一家の稼ぎ手から一家の重荷へ：貧しい男性の役割の変化

5体満足で、健康ですが、生計を立てることができません。

—ラトビアの失業者, Latvia 1998

幸福な人とは、働いている人のことです。

—ニジェールで実施されたPPAの報告書より, Niger 1996

男性の役割が、収入を生み出す潜在能力と直接関連している場合、そのような能力を脅かすものは、ジェンダー・アイデンティティに対する脅威となり、男女間の問題へと発展していく。南アフリカのPPAは、「家庭内労働分業や高失業率、男性の軽視化といった現代の問題に直面している男性が、家庭内において社会的・経済的役割を有効に果たせなくなっている状態」を、不安に感じている、と報告している(South Africa 1998)。同様に、モルドバの報告書には次のように記されている。「かつて男性は比較的高い所得を得ており、彼らは一家の稼ぎ手や家長とみなされていた。しかし、必ずしもそうであるとは限らなくなってきており、自分よりも妻の稼ぎが多くなると、男性は疎外感を感じる。このような緊張状態は、家族のストレスや家庭崩壊の原因となってしまう。女性はしばしば一家の財政状態を夫の責任とし、仕事を見つけれずにいる夫を非難する。失業中や不完全雇用の男性は、無力感や怒りを感じて平静心を失い、妻や子供に暴力をふるう者も出てくるのである」(Moldova 1997)。

男性のアイデンティティは、民族アイデンティティと相交わることがあり、男性の職業選択の自由を制限することがある。マリでは、「先住民の男性にとって、選択肢は非常に限られている。多くの場合、文化的タブーから、他民族の仕事や(例えば、漁業はボゾ族の活動なので、農民は漁業をすることができない)、特定の社会的地位に属する男性の仕事(例えば鍛冶屋や陶工)に従事することを妨げられているのである」(Mali 1993)。

仕事に就くことが困難になると、男性はあきらめ、家族を見捨ててしまうことがある。「男性は、社会的に無能であるという意識や、一家の稼ぎ手として、社会的に重要な役目を果たすことができないという意識を顕わにしていた…。多くの女性が、男性はストレスに負けてしまったと感じており、その一方自分達は、子供に対する責任意識や、男性より強い精神的順応性を持ち合わせているため、より重い負担を背負い、解決策を探し出そうと積極的に行動する、と考えていた」(Latvia 1997)。

男性の自尊心と所得獲得の能力との結びつきが余りにも強いため、男性が女性の所得に依存している事実を受け入れるのは難しいかもしれない。例えばパキスタンの農村部で男性にインタビューを行った際、調査員は女性の経済活動の範囲を把握することが極めて困難であると感じた。家を空けて外で働いていることに関する女性に対する社会的汚名と、妻が収入を得るために働かなければならないことに対する男性側の屈辱感の両方が存在するのである。保健・医療などの「安全な」問題を話した後でなければ、女性の経済活動について尋ねることができないと調査員は感じた。こうした話し合いを重ねるうちに、女性は飼料や燃料木を集めるために長い距離を歩いている上に、近くの地主や隣接する地方の農地で働いているということが明らかになってきた(Pakistan 1993)。

家族の1人1人は、環境の変化に適応しようとするうちに、しばしば無意識にジェンダーの役割を再定義している。こうした行動や機会は、国家、市場及び社会という大きな制度・組織の影響を受けている。こうした環境の下、家庭は存在し、相互に作用しているのである。子供のために伝統的な役割から抜け出すという行いは、男性よりも女性の方が簡単に受け入れることができるかもしれない。例えばラトビアでは、伝統的に女性が行うとされている仕事を男性がすることは恥であるとされているが、「子供達を食べさせるために、女性が男性の仕事をすることは、社会的に認められている。現代における一家の稼ぎ手とは、もはや子供を含め、労働により収入を得ることができる全ての者なのである。そして、この役割は家族全員に同等の権威を与えるのである」(Georgia 1997)。男性が一家の稼ぎ手でなくなったとみなされ、また実際にそうなってしまうと、家庭内に争いが起きる。また、女性が援助を求めることは、男性がそうするよりも文化的に受け入れられや

すいこともある。「絶望的な状況にある時、女性は親戚や女性グループに、できるだけ控えめに贈り物を求める。男性はそのようなことをしないであろう。しかし、女性からの支援の要請は、『彼女達は自分の子供達のためにそうするのであり、子供は地域社会の一員であるから』、という理由で、受け入れてもらいやすい」(Mali 1993)。

男性が家族の生計を立てるとい期待が伝統的に存在するため、失業などの理由でその期待に応えられなくなったり、問題に対処するために男性が取る行動により、家族全体が影響を受ける。ガボンのある若者はこう言っている。「時が経つにつれ、失業は若い男性の自尊心を害していきます。男性達は父や家長としての重大な義務を果たせていないと思ひ始め、飲酒や暴力に走るのです。明日子供達をどのように食べさせていいかわからない時に、私も時間をかまわずにお酒を飲んでしまいます。そうすると問題を忘れられるのです」(Gabon 1997)。

もちろん、全ての男性が破滅してしまうわけではない。ある社会では、ジェンダーによる適切な役割分担が厳格に存在しているにも関わらず、女性に新しい一家の稼ぎ手としての役割を担ってもらい、家庭の新しい役割に順応し、経済的ストレスを上手く処理している男性もいる。パキスタンのある都市の貧しい男性達は、子供を抱いて多くの時間を過ごしている。しかしながら、家庭内の雑用の責任を主に担っているのは未だに女性である(Pakistan 1993)。

## 女性：新しい一家の稼ぎ手

女性がお金を欲しがろうが欲しがらまいが、お金を管理するのは男性でなくてはなりません。というのも、もし女性がそれを拒絶すると、女性は[家から遠く離れた場所へ]追いやられる危険にさらされるからです。

—ウガンダ・カバロールの女性, Uganda 1998

働き口があっても、女性ではなく男性が雇用されるのです。

—メキシコで実施されたPPAの報告書より, Mexico 1995

貧困に苦しむよりも、他人の家のごみ箱をあざりに行った方がましです。

—モルドバで実施されたPPAの報告書より, Moldova 1997

多くの貧しい女性は、家族のまとまりを維持し、子供を食べさせるために、危険や差別があるにも関わらず、必死の思いでインフォーマルセクターで働く。インドのPPA (India 1997a)には、典型的なパターンが示されている。それによれば、「地

方の奥地で特に顕著なことであるが、女性は過度の賃金差別により、同じ労働に就いている男性よりも常に少ない賃金しかもらえない。男性が個人の用途(例えばタバコや酒、ギャンブル)に収入の大部分を使う一方で、調査を実施した村の女性は事実上、全収入を家族のため(例えば食料や医療、学費、子供の衣料費など)に捧げている」という。繰り返し明らかになったことは、男性にとって避けたがる屈辱的な仕事でも、女性は子供の生活を守るために、働く覚悟ができていて、という点である。例えばスワジランドの女性は、生き延びるために、労働の代価に賃金ではなく食事をもらうプログラムに従事することは、不可欠であると考えているが、男性はそのようなプログラムに参加しようとは思わない。なぜなら、男性はそのようにして働くことが「下劣で、奴隷的で、適切ではない」と考えているからである(Swaziland 1997)。上述のように、男性の中には、家族を見捨てるという道を選ぶ者もいる。

フィリピンのミンダナオの低地では、困難な時期を何とか乗り切るために、「女性は行商や洗濯、裁縫或いは別の卑しい仕事をしている。他方、町の中心部で仕事を探している女性もいる。彼女達は1000個当たり30ペソで乾燥ココナッツの実をくり抜く仕事をしている。また、1000個当たり60ペソでココナッツを収穫する仕事に就く女性もいる。そして彼女らは、1対7の分け前で米を収穫する。農場労働者としても働く…。食料不足の間、彼女達は朝食や昼食に根菜類やバナナを食べ、夕食に米を食べる。通常、女性は自分の食事を犠牲にしても、子供達や夫のための食料確保を優先させる」(Philippines 1999)。

男性が失業し、不完全雇用の状態に陥った場合、家庭は徐々に女性の収入に頼ることとなるが、女性は、劣悪で自尊心を傷つけるとみなされる仕事で収入を得ているのである。シャルムによれば、インフォーマルセクターにおける労働力の内、女性が占める割合は20～80%の間で、国によって異なる(Charmes 1998)。世界的に見て、インフォーマルセクターで働いている女性はまだ少数であるが、同セクターにおけるGDPの大部分は女性が生産している。なぜなら、女性が同セクター内で複数の経済活動に携わっているからである。ラテンアメリカやカリブ海諸国を例外として、開発途上国の働く女性の多くは、インフォーマルセクターで働いている(Charmes 1998)。<sup>7</sup>

インフォーマル経済セクターは、法律上の規制や課税が及ばない領域であり、全体的に経済が緊迫状態になると増大する傾向にある。インフォーマルセクターは、女性に所得を得る機会を提供するが、それには高度の危険も伴っている。なぜなら、インフォーマルセクターで働く人々は、頻繁に搾取され、虐待され、身体的に過酷で危険な業務に従事することを求められ、他方で、法に頼ることができないからである。キャストラス(Castellas 1997)やポーターズ(Portes 1998)は、イン

フォーマルセクターを「社会闘争の境界線上で、弱すぎて自分を守ることができない者を取り込み、衝突や争いを過度に持ち込む者を拒絶し、根気と起業家精神のある者達を駆り立てる場」と特徴付けている。その他の特徴として、シャルムは、小規模の経済活動、自営業（通常、家族や年季奉公人の大部分を含む）、少ない資本と乏しい設備、労働集約型の技術、低い技能、低レベルの組織、そして、組織化された市場・公的な融資・技術訓練・各種サービスへのアクセスの制限が含まれる(Charmes 1998)。

女性は依然として労働市場で不利な立場にある。それは、子供は労働者の重荷とみなされるが、女性には育児という大きな責任があるからである。雇い主は、20代前半の若い女性を雇いたがらない傾向がある。「なぜなら、雇い主は彼女が近いうちに妊娠し、産休をとるのではないかと恐れているからである。もし彼女が既に子持ちの場合、子供が頻繁に病気になり、看病のために仕事を休むのではないかと警戒する」と報告している(Ukraine 1996)。

労働市場における女性の不安定な立場は、国によってその形態が異なる。東欧や旧ソ連では、若い女性に対する性的期待が広く行き渡っているようである。そのため、25歳以上の女性が職に就くことが難しい。ウクライナのPPAによれば、「20代前半の女性労働者達は、よくセクシャル・ハラスメントを受けたと不平を言う。雇い主は、それを受け入れなければ失業すると分かっている女性労働者に対して、そのようなことを要求する権利があると考えている。雇い主は、若い女性が生計を立てられるだけの安定した職を探すには、すさまじい苦闘に直面しなければならないということを知っているため、一層論外な要求を、女性労働者に対して行う。こうして女性労働者は互いに文句を言い合うことだけしかできないのである」という(Ukraine 1996)。

マケドニアの貧しい失業者達もまた、25歳以上の女性は雇ってもらえず、また外見が魅力的であることが、採用における要素であると語っている。高年齢層(25歳以上)の女性達は、「私達が洗濯や皿洗い、売り子、秘書の募集広告に応募しても、彼らは私達の年齢を知ると、年だから雇えないと言うのです」と語っている。さらに、スコピエの失業中の女性は、「私は洗濯系の募集広告に何度か応募し、ある場所でオーナーと会う約束をしました。1時間待っても誰も来ませんでした。彼らは遠くから私を見て、私が41歳で若くなく、魅力的でなかったから、帰ってしまったのでしょ」と述べている(Macedonia 1998)。

バングラデシュ(Bangladesh 1996)の多くの地域では、貧しい女性達は、雇用機会の不足が深刻な問題だと述べている。しかし、彼女達は家や子供から離れることができないと感じているため、自宅を拠点とした自営業の機会を求めている。男性が5kgの穀物を報酬として受け取る場合、女性は3kgしか受け取ることができない、と

女性に対する賃金差別が、ネパールのPPAに報告されている(Nepal 1999)。

ルワンダの女性は、様々な方法によって経済的変化に対応し、生き延びようとしている。その中には、中流・上流階級の家の子供の世話や庭掃除、家事といった、家事労働の割合を増加させる方法が含まれている。その他の手段として、建設業、道端の小さなブースや売店での販売業、1軒1軒の各家庭への売り歩き、公的及び慣習的な相互融資制度の利用など、伝統的に男性の仕事とされてきたものも含まれている。多くの場合、この種の仕事は法で規制されておらず、女性は窃盗や警察による嫌がらせ、その他の危険にさらされている。ルワンダのPPAは「マラソンをする」という言い回しを、次のように説明している。「市場で場所を借りたり、地方税を払う術がないために、女性は走り回る。未認可地域を巡回する警察官を避けるために町中を行き来するということに、マラソンの語源がある」(Rwanda 1998)。

ニジェールのPPAは、家族を守るための女性の順応性や決断について報告している。「商業活動には危険が伴う。破産すると、その後資本を再び立て直すことは困難となる。たとえ小規模で低収入であっても、多くの男性が商業活動を避けるのに対して、女性は何度も市場に戻っていくのである。聞き取りを行った都市部の貧しい家庭では、仕事はわずかな収入をもたらす小規模商業に限られており、それは主に女性の活動であった。女性が行っている仕事の中で最も多いのは、調理品、特にブルと呼ばれるキビの小麦粉と凝乳の混合物の販売である。布地や新鮮な魚を売るために、ベニンの国境や川沿いの村へ移住した女性もいる。また、小規模な仕事に従事できない女性は、販売員や女中として働く人のためにキビをすり砕く」(Niger 1996)。

女性は、非伝統的な方法で経済的に家族に貢献すると同時に、主婦としての伝統的役割も担い続けている。インドのPPAは以下のように報告している。「[女性は]水汲み、薪木の収集、食料品の調達、食事の用意、畑にいる男性のための食事の運搬、掃除、洗濯、子供の世話といった家庭の仕事に、大きく貢献している。女性は、家事の全責任に加えて、農場や道路建設で働き、糸を紡ぎ、ビディという手巻き葉タバコの製造にも従事しており、彼女達の仕事量はかなり増えている」(India 1997b)。

結果として、女性が担う全体的な労働負担は、男性の負担と比べて増加している。ナイジェリアの報告書は以下のように示している。「1日の時間配分を見ると、都市と農村の両方で、女性は1時間で複数の役割を果たしている。アケジュ・ラビンに住むある女性は1時間の間に、炊事、子供への授乳、食材の採集、家庭用品の洗浄、ココア干し、ヤムいもやキャッサバ粉の用意を行った」(Nigeria 1996)。女性の1日の大半が、有給、無給両方の労働に費やされている(Box 5.1参照)。そのような中で、女性は孤独感を訴えている。スワジランドのPPAによれば、それは、

## Box 5.1 南アフリカにおける女性の家庭内労働

無報酬の家庭内労働は女性にとってフルタイムの仕事です。彼女達は、育児や農業、買い物、炊事、水の確保などをバランス良くこなさなければなりません。

私は赤ん坊に食事をさせたり、体を洗ってあげたりして、赤ん坊とずっと長く過ごしたいです。しかし、水を汲むのに2時間かかります。そして、農作業をするのに多くの時間がかかってしまうのです。赤ん坊に時間通りごはんを食べさせられるかどうかわからないまま、赤ん坊をおいて、午前4時頃起床し、畑に行かなければならないのです。

時々、私は家事に疲れて、きちんと赤ん坊の面倒を見ることができなくなってしまいます。

冬になると、私達は、川から水を汲んできて野菜に水をまくのに、時間がかかってしまい、庭で過ごす時間がより長くなってしまいます。

出典： *South Africa 1998*

「仕事のせいで、友人と気晴らしする時間をもつことができないからである」(Swaziland 1997)。エクアドルの調査によると、「調査を実施した地域社会の女性は1日15～18時間働いている。文化上、女性が余暇を楽しむものではないと考えられ、女性は歩いたり話したりする時でさえ、毛糸を紡いで働いていることがある」(Ecuador 1996a)。

また、女性の仕事量は子供にも影響を及ぼしている。ウガンダでは、女性の労働が1日15～18時間にも及ぶため、その時間的余裕がなく疲労も重なり、子供を軽視するという結果を招いている。さらに、より若い世代や都市部の女性は、家事の量を減らすことなく、家庭外での労働を増やしている。しかし、女性の家庭外での労働が利益を生み始めると、もはやそれは女性の仕事とはみなされず、男性がそれを引き継ぐのである。アルア地方では、「換金作物の生産が、収穫だけでなく、販売やマーケティングへと移行したことで、男性が関与するようになり、女性の関与が減少していることが明らかになった。そのため、男性が販売活動により現金収入を得る一方で、女性は手作業労働の大部分を受け負うこととなった」

(Uganda 1998)。

労働力となる女性は、非伝統的な職業と伝統的な職業の両方で仕事を探すことになる。実際に女性は、奉公人やメイドのような伝統的な職業だけでなく、商業や出稼ぎ労働、時には売春に従事している。

## 交易：女性にとっての成長の機会

私は密輸入者となるよう育てられたものではありません。以前の社会秩序の下でも、そのような活動は罰せられ、当然のことながら嘲笑されていたのです。

—マケドニアで実施されたPPAの報告書より、Macedonia 1998

シャルム(Charmes 1998)は、東欧と旧ソ連の女性達が、交易活動における労働力の65%を占めていると立証している。グルジアのPPAでは、「興味深いことに、女性が1人で海外に出かけたり、家族と離れたりすることは、かつては女性にとって不適切であるとされていたにも関わらず、女性が交易活動において重要な役割を担うようになってきている。男性社会に特有な、物事を進めていく上で媒介とする昔からのつながりや手続きに則って、女性が男性社会に融合していくことは難しく、そのために女性達は自分達に適したこの新たな隙間産業へと進んで行ったのである。また、子供や家族の日々の生活に対する女性の責任感が、女性達に自尊心を捨てさせ、行商のような『不名誉な』活動へと自身を駆り立てる強い動機となった」と報告されている(Georgia 1997)。

女性達は、地域内で物資の輸送をしながら、積極的に交易活動に従事してきた。多くの国々で、女性は男性と比べて警察や国境監視員の嫌がらせを受けにくい。アルメニアでは、多くの若い男性達が徴兵から逃れようと身を隠すため、女性の方が商人としての仕事をしやすいと、人々は感じている。グルジアでは、女性達は貿易や物売りをするために、ロシア、トルコ、ハンガリー及びポーランドなどの国々を、小グループで旅する。彼女達は、様々な犯罪組織や腐敗した警察と闘わなければならないのである(Georgia 1997)。アルメニアの女性交易商の大部分は、未婚者、未亡人、離婚した女性、失業中の夫を持つ女性達である(Armenia 1995)。また、女性の方が当局に疑われにくいいため、国境を越えた麻薬の運び屋として、彼女達が多く雇われるようになってきている。

マケドニアの貧しい家庭は、ブルガリアやトルコから商品を密輸入し、地方の街や市場で売りさばくために、貯金を使い、友人や親戚に借金をしている。マケドニアでは、「密輸入をする女性は珍しくない。彼女達は、それほど疑われない

ため、男性より簡単に国境を越えることができるのである。しかし、密輸入でお金を稼ぐ女性の中には、この行為によって自らの自尊心が傷つけられると感じている人もいる。『私は密輸入者となるよう育てられたものではありません。以前の社会秩序の下でも、そのような活動は罰せられ、当然のことながら嘲笑されていたのです』(Macedonia 1998)。

カメルーンのPPAは、インフォーマルセクターへの女性の参加は、良い結果と悪い結果の両方をもたらすと報告している。「インフォーマルセクターへの女性参加の増加は、女性のエンパワーメントと革新への道を築いた。そして、ある地方(カメルーンの極北部)では、女性の可動性を高めた。このような変化は、増え続ける[学校]中退率、早婚、そして収入の減少に対処する方法として広がっている若い女性の売春の増加を抑制している」(Cameroon 1995)。

## 家庭内労働者とメイド

私達は生活しているとは言えません。ただ生き延びているだけです。

—タンザニアの女性グループ, Tanzania 1997

家事労働は一般に、ジェンダーによる家庭内分業を通じて、事実上家事労働者となるよう教育された少女や若い女性が担っている。インドのPPAは、「少女達は母親の家事を手伝わなければならない、家事に関する最低限の知識は、自宅で身につけることができる」と報告している(India 1998a)。こういった技能が労働市場の中に取り込まれていくのである。

例えばセネガルでは、農場労働者の需要の減少から、農村部の女性や少女達は職を求めて都市部に移住する。「水田での労働者が需要が減少すると、多くの少女達が、メイドや洗濯係などの(低賃金の)仕事を求めて、都市部へと移住する(家庭内労働者の41%は18歳以下である)」(Senegal 1995)。ニジェールでは、「娘達はメイドとして働き、そこから昼食と夕食を持って帰ってくる。彼女達の月給が3000フランを超えることは滅多にない。このおかげで、私達は調理した料理を販売する小さな商売をしている。家族用に少し取っておくが、そのほとんどが売ってしまう。稼いだお金で水や石鹼、調味料などを購入する。収入は、月末までどうにかやりくりできるほどのものである」(Niger 1996)。

低賃金の家政婦の報酬は、現物支給になることもある。パキスタンの雇用主の中には、家政婦に対して教育費を支払う者もいる。「しかし、個人的な思いやりや保護は、労働による借金返済、忠誠心、特定の政党を支持することなどと引き換えに行われるという、言ってみればひも付きの場合が多い」(Pakistan 1993)。

しかしながら、家政婦は相当の収入を得ることができ、その賃金は男性の専門的な仕事や臨時労働よりも良い場合がある。例えば、ニカラグアの教師の基本月給は506コルドバスであるが、家政婦の月給よりも少ない。ある教師は、「メイドは700コルドバスを請求し、クリスマスや休暇にはボーナスまで要求します」と述べている(Nicaragua 1998)。パキスタンでは、「技能を持たない男性が、臨時労働で月に700から1000ルピー稼ぐ一方で、ラワルピンディのドック・ナディに住む女性家政婦は、月に600から1000ルピー稼いでいる。ただし、男性達の賃金が、この相場で保証されているのは夏の繁忙期だけである」(Pakistan 1993)。

比較的高賃金に加えて、現物支給があったとしても、家政婦達は生きて行く上で十分な収入が得られない場合が多くあり、PPAが示すように、彼女達は別の収入源を見つけなくてはならない。そして、家政婦達は、雇い主による労働時間や給料の削減、そして家事労働セクターにおける失業に対して脆弱である。セネガルのPPAでは、通常の家計では余分な費用を削減するために、メイドや洗濯係などの低賃金労働者の労働時間や給料をできるだけ減らそうと努めていると報告されている(Senegal 1995)。エチオピアでは、「[家政婦]の中には、絶望に駆られて、隠れて売春を始める者もいる」と報告されている。

幼い少女達をセクシャルハラスメントから守るために、メイドとして働かせないように努める両親など、職場での嫌がらせや家政婦への虐待が、いくつかのPPAにおいて報告されている。パキスタンのPPAでは、年配の女性達が、職場でのセクシャル・ハラスメントから娘達をどのように守ろうとしているかを報告している。例えば、「ラワルピンディ地区のドック・ナディでは、作業の厳しさや頻発するセクシャル・ハラスメントから娘達を守りたい一心で、年配の女性達は体力が許す限り、家政婦として働くことを続けている」(Pakistan 1993)。家政婦という職業は、比較的賃金が良いにも関わらず、一般的に低身分で好ましくない仕事だと考えられており、女性の職業の中でも、最終手段と見なされている。

## 女性の出稼ぎ労働者

私達は子供達と一緒に、食糧と夫を探すため、ニアメへ来ました。  
私の従兄弟や兄弟達のように、旅をするお金が無く、村に残っている人達は、今頃どうしていることでしょう。

—ニジェールで実施されたPPAの報告書より, Niger 1996

伝統的に女性の仕事であると考えられている職業がある一方で、以前は男性の仕事の領域とされていた出稼ぎ労働に関し、ジェンダー規範が変化してきてお

り、出稼ぎを目的とした女性の移住が増加している。外国や他の地域でより賃金の良い家政婦の職を見つけようと、女性の労働移住が起きている。次に挙げるモルドバの例に見られる様に、外国で家政婦をすることが、若い女性の貧困の解決策であるとみなされている。「以前は男性の仕事の領域とされていた、季節労働を目的とした移住をする女性が増加している…ギリシャは若い女性達の重要な出稼ぎ先となった。彼女達は月400から600米ドルでメイドや子守りとして働くのである」(Moldova 1997)。

家庭は出稼ぎにより様々な危機に直面することとなる。出稼ぎは、労働する本人にとっても、彼らからの仕送りに頼って生活する家族にとっても危険である。送金自体、定期的に行われるとは限らない。南アフリカのヌクンドゥシでは多くの女性達が、送金の金額は少なく、またそれが不定期であることが多い、と述べている(South Africa 1997)。グルジアのマルネウリのある家庭では、出稼ぎに行ったまま姿を消してしまった家族の1人が仕事に失敗して作った借金2000米ドルを抱えることになった(Georgia 1997)。出稼ぎ先の国に仕事があるとは限らず、移住自体、賭けなのである。ニジェールのPPAの中で女性移住者はこう述べている。「ニアメはここ2年で変わってしまいました。最近では仕事もなく、(村に送るための)乾燥食料もなく、古着もありません。ここで生活する人々は、自分達の物さえ十分でない状態なのです」(Niger 1996)。

マリにおける最近の現象として、女性が収入を求めて移住していることが挙げられる。女性が自分の下を去ることを容認しない男性が多いため、女性の移住が認められることはほとんどない。「女性が移住するなら、全員が一緒に移住する」と男性は言う(Mali 1993)。女性達は工芸品を物々交換するために稲作地に行ったり、そこで働いたり、収穫作業をしている人のために食事を用意したりする。彼女達への支払い、米を主とした物品で行われることもある。女性達が家に持ち帰る2、3袋の米は村で売られ、男性が家に持ち帰る米は家庭で消費する分として貯蔵される。若い女性達も、メイドや洗濯係として都会に出稼ぎに行く。彼女達の給料は、一部は結婚持参金として貯蓄され、また一部は夫或いは父親のものとなる。

さらに、移住に同行する家族は、受入れ国の社会サービスが受けられない可能性もある。例えばベトナムのある男性によると、家族の中で公式な永住権を持っているのは自分だけだったという。母親と子供達は長期滞在者として分類され、無償の公共医療も教育も受けることが出来ないのである。

*Dさんは夫と4人の子供達と共に、1986年から第5地区に住んでいました。…彼女は毎日、町の様々な場所へ出掛け、再利用できる物を買ひ、ほんの少し利益を上乗せしてそれらを売るのでした。夫は公*

的な永住権を持っていますが、彼女は持っていません。結婚の届出が遅れたため、Dさんと子供達は長期滞在者としてしか登録されていません。上の子供達3人は、全日制の学校には通えないので、夜間に授業を受けています。1番下の娘は4歳になりますが、幼稚園には通っていません。「どうやったらそんなお金が払えるのでしょうか」とDさんは尋ねます。以前受けたお腹の手術の傷跡が痛み始めてから1週間になります。お金が払えないのではないかと心配して、彼女はあえて病院に検査を受けに行こうとはしません。近所に住む貧しい人々が持っているような無償の医療サービス回数券も持っていません。地元の薬局で鎮痛剤を買うしかないのです。

—ベトナムで実施されたPPAの報告書より, Vietnam 1999b

家族全員で移住しない場合、残った家族達は、労働分担を新たに仕切り直せざる終えないかもしれない。モルドバのPPAは、ジェンダーによる役割が移住に関連してどのように変化していくかを示している。「夫の、場合によっては妻の長期に渡る不在により、家族の中の権力関係や労働分担を変えざるを得ない状況に陥る。あるひとつの季節、もしくはそれ以上の期間夫が家を空けると、…伝統的に男性のものとしてきた責任や意思決定権を女性が引き継ぐようになる。時として夫の長期不在が、家族の放棄に転じることもある。つまり、男性が出稼ぎ先で新しい家族を作ってしまう、残された家族は、女性が自分自身や子供達を出来る限り支えていかなければならないという状況に陥るのである。逆に、海外への移動を、新しい夫探しに利用する女性もいる。妻が外国で働くことについて、夫達が反対することがあるが、これは妻の不在が長引くと、離婚につながるのではないかと恐れているからである」(Moldova 1997)。

男性も女性も、仕事をしている現地で新たな家庭を築くことにより、出稼ぎが最終的には家庭崩壊を引き起こしかねない(Moldova 1997)。同様に、夫がロシアで出稼ぎをしているアルメニア共和国の若い妻達は、時として自分達が弱い立場に置かれていると感じる。義兄弟や義父が、家に残されたこの若い妻に近づこうとするからである。アルメニアの家族を見捨てる男性もいれば、ロシア人の新妻をアルメニアに住む最初の妻と子供達のもとに連れて帰り、一緒に暮らす男性もいる。「アルメニアの妻達は、ロシアからの収入に自分や子供達が依存していることを理解しているので、苦悩や屈辱に耐える傾向にある。しかし時には、この2つの家族が前向きな関係を築き、ロシア人の妻がアルメニア人の子供達に教育を受けさせるため、ロシアに連れて行くこともある」(Armenia 1995)。モルドバやグルジアのPPAでは、出稼ぎが家族の関係をゆがめる一方で、多くの女性が、出稼ぎ

によってもたらされる独立した収入の恩恵を受けている事例が紹介されている (Moldova 1997; Georgia 1997)。

## 移住と性労働

愛人達がいるから、私はやっていけるようなものです。

—グルジアで実施されたPPAの報告書より, Georgia 1997

少女達は、お金を稼ぐために家を出ることを恐れなくなりました…。この産業に関わっている多くの女性達はHIV/エイズの犠牲者となっているのです。

—カンボジアで実施されたPPAの報告書より, Cambodia 1998

労働者の流動性の増加は、男性・女性に関わらず、性労働に関連して生じる場合がある。例えばアルメニアでは、「女性商人の中には、海外にいる間に売春行為を行っている者もいる。家族や、夫でさえも妻の売春を見て見ぬ振りをしている。家族にとって収入はどうしても必要だからである。ペルシャ湾を拠点とする貿易業者の反対を受けているのだが、ドバイでの売春はかなり儲けることができる」(Armenia 1995)。エチオピアのテクレハイマノトのあるグループ討論では、1993年から売春が増えてきたことが指摘された。農村部からの女性移住者の流入や、以前はメイドとして雇われていた<sup>8</sup>ケベレからやって来る女性の増加により、経済的な理由から売春婦になる者が増えたのである (Ethiopia 1998)。

移住して性労働を行うことによって、通常は恥ずべきこととされる仕事に就いている個人の名誉を保つことができる。マケドニア東部出身のシングルマザーは次のように説明する。「45歳の私にはもう無理だと感じてはいるのですが、売春をせざるを得ず、子供達に対する恥を忍んで行っています。自分の住む町で好ましくない状況が起こるのを避けるため、近隣都市で仕事をしています」(Macedonia 1998)。グルジアでも同様に、「グルジアの外、特にギリシャやトルコで売春をすれば、いくらか恥をしのげると考える女性もおり、売春の際に物と交換したり、時には家族に送金をしている」(Georgia 1997)。「愛人」という言葉はPPAの報告の中では婉曲表現として使われていることがある。離婚したロマの女性は、「(お金やプレゼントをくれる)愛人達がいなければ私は生きていけないでしょう」と説明する (Georgia 1997)。スワジランドの女性はセックスと引き換えに食料をもらっているという (Swaziland 1997)。モルドバの多くの新聞が、「性格がよく自意識過剰でない女の子」の求人広告や、週末や休暇の案内を、共に過ごせる若い女性達のリス

トと写真と一緒に掲載している(Moldova 1997)。

性労働の中にも子供や女性の売買を含め、様々な形態が出現してきた。すなわち、子供の闇取引や嫁としての女性の売却などである。「グルジアのマルネウリでは、女性や少女達を嫁としてウズベキスタンの買い付け商人に売るように言われた家族が何世帯かあった。1989年から1992年には、その値段は3000から5000ルーブルであった」(Georgia 1997)。

カンボジアでは、貧しい女性達が性的に搾取されているとの報告が、グループ討論中になされた。これは、「他に生きていく方法がないため、おびたしい数の若い女性達がこの職業を選ばざるを得ない」からである(Cambodia 1998)。貧しい女性達は、著しい増加の理由として、以下の3点を挙げている。「第1に、ほとんどの家庭が深刻な金銭不足に直面し、誰もが一生懸命働かなくてはならなくなったこと。第2に、農業労働者の需要が減少し続けているため、少女達が農業以外の職を求めるようになったこと。第3に、家庭内暴力の増加に伴い、カンボジアでの離婚率が急上昇したことです。離婚後の女性に生計を立てる術はなく、家族の土地に対する権利もないのです」(Cambodia 1998)。

## 結末と対処

朝、彼は目覚めると私を見て「夕飯はあるか」と尋ねます。何も無いと応えると、彼は飲み始めるのです。

—グルジアのトビリシの女性回答者, Georgia 1997

経済的变化や、その影響によるジェンダー間の役割の変化は、家庭内に大きな緊迫、恥辱、争いを生み出す。家族に十分な貢献ができないと、男性は自分が無力で必要のない存在なのだと感じ、暴力的に振舞うようになる。一方、女性は家族の面倒を見続けるのだが、時として夫との暴力関係を断ち切ろうと家を出て行くこともある。女性は収入を得て貯蓄を始めると自信をつけていく場合もあるが、雇用との繋がりが希薄なため、立場は弱いままとなる可能性もある。

グルジアのPPAの報告によると、社会的に求められる一家の稼ぎ頭としての役割を維持出来ない男性が多く、彼らは「自分達を軟弱だと思ふ気持ちや敗北感が、体調不良や急激な死亡率の増加、アルコール中毒、妻や子供達に対する身体的虐待、離婚そして家族放棄の原因になることがよくある、と感じている」(Georgia 1997)。

## アルコール依存

食べて寝て、目が覚めるとまた飲みに行きます。

—ウガンダで、「あなたの地域の男性はどのような仕事に就いていますか」という質問に対する女性達の回答, Uganda 1998

夫がアルコール中毒だったので離婚しました。彼は家財を売り始めたのです…お酒を買うために。庭もなくなりました。物を売るのを止めようとすると、私をたたくのです。彼が追ってきたので、私はコロゴチョのスラムへやって来ました。

—ケニアで実施されたPPAの報告書より, Kenya 1996

アルコールはストレスを抑えたり、和らげたりするのによく用いられるが、家族には強いマイナスの影響を及ぼす。マケドニアではここ数年で、男性はますますよく飲むようになったと報告されている。「男達はいつも、誰かが飲み代を持っているとわかると飲む。男性の飲酒は家族にとっては苦痛だが、大きなしゃべり声や叫び声、うるさい音楽などにももう慣れてしまっている」(Macedonia 1998)。

「最も一般的な貧困の原因は、一家を支える大黒柱の死、離婚、中でも最も多いのが男性のアルコール中毒である」とラトビアのPPA報告は主張している(Latvia 1997)。酒代でかさむ出費や、男性が稼ぎを娯楽に費やすことが、家庭にさらなる金銭的負担をもたらしている(India 1998a; South Africa 1998)。ある報告によると、アルコールの過剰摂取は、家庭内或いはその周囲にも争いを引き起こす一因となる。インドのPPAによれば、「男性達の中毒的な飲酒の習慣が、家族の財政的、精神的幸福をひどくおびやかしている。また家庭内、そして地域社会全体にも多大な問題を引き起こす。伝統的な酒であるマファ酒が手に入らなくなり、男性達の飲酒の習慣に変化が出てきた。マファ酒は家庭の金銭的負担にそれほどならなかったが、今ではより高価な酒を飲み、2～3時間で日給を丸々使ってしまうのは珍しいことではなくなったのである」(India 1997a)。マケドニアでは何人もの女性が、飲酒による交通事故で夫を亡くしたと報告している(Macedonia 1998)。

ベトナムでは、男性が貧しさと向き合う際の拒否反応として、飲酒、薬物の乱用、賭博、家庭内暴力、犯罪の全てが挙げられている(Vietnam 1999b)。男性のストレスに対する消極的な打開策とは対照的に、女性は不安に対応する能力に特に長けていると、いくつかのPPAは示している。ラトビアのPPAでは、男性とある程度の人数の女性はともにアルコールを過度に摂取するものの、「男女問わず多くの回答者が、経済的に逼迫している時には、女性の方が精神的に強いと感じている。おそらくこれは、女性のアイデンティティがどちらかという家事や子供の世話その

ものに依存しているからであるが、収入を得ることにアイデンティティが左右されやすい男性は、危機的状況により弱く、経済的困難の時にはアルコール依存症や、自殺を考えるほどの鬱状態になってしまう」と報告している(Latvia 1998)。

## 暴力

どの地域社会でも、妻に対する暴力は日常生活のひとつまでと思われ  
ています。

—ジャマイカで実施されたPPAの報告書より, Jamaica 1997

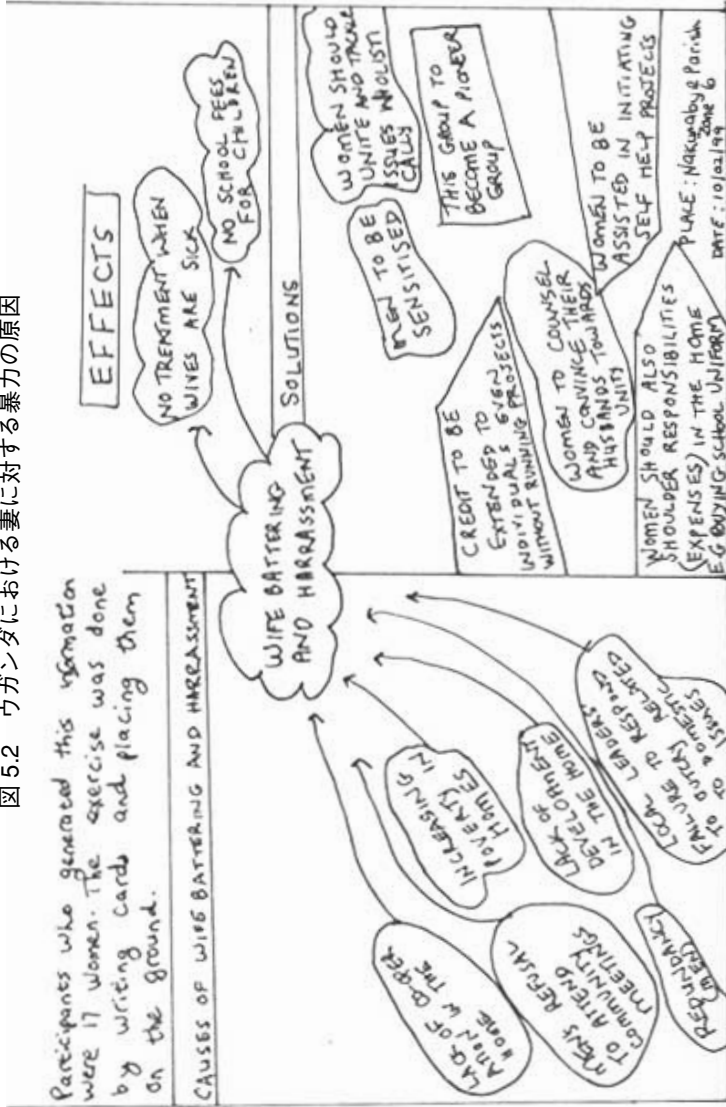
女性に対する暴力は人権の基本的侵害である。虐待を受けた女性は身体の負傷に加え、健康状態や精神的な問題にも悩まされている。虐待された女性達は、何が暴力を引き起こすのかという困惑、暴力を止める可能性が見出せないという絶望の念、そして夫の暴力的支配の下に甘んじている孤独感や憂鬱感といったように、暴力に関して様々な感情を抱いている。中には、暴力から逃れる一つの手段として、自殺を考える女性もいるのである。

多くの国々の女性達は、家庭内暴力が広く存在していることを認知している。ウガンダのように問題が比較的公に認識されていると、女性達は何が暴力を引き起こすのか、図表にしたりもする(図5.2参照)。グルジアでは、「結局殴られて夫婦喧嘩が終わる、と女性達が告白した」と報告されている(Georgia 1997)。

PPAの対象となったジャマイカの全ての地域社会において、妻に対する暴力は日常生活で当たり前の出来事だと認識されている。女性達が自らの体験について気兼ねなく話せると感じる場では、日々の家庭内暴力やその恐怖、逃れられないという感覚などに関する話があふれ出てくる。ジャマイカのグリーンランドに住むある女性は、18年間一緒に生活を共にし、愛していた男性が、彼女をいつも「たたき棒」のように扱っていた様子について語っている。いくつかの地域の若い女性達によると、女性のほとんどが暴力を受けているが、それを隠していると言っている。家庭内暴力は男性と女性、双方の態度に関連しているということが、多くの地域について言える。女性は雇用を男性に頼っており、男性の失業から起こる不満や失望感が暴力の悪循環を引き起こすのだが、通常2人はその後仲直りする。珍しい例では、「女性が男性を殴ったり、男性を捨てたり、或いは警察を巻き込んで男性を投獄したりすることで、この暴力の悪循環は断ち切られた」というケースもあった(Jamaica 1997)。

バングラデシュの調査員によると、男性が妻を殴るのは自分達の権利だと考えており、宗教論や社会学上の理論を用いてこの権利を正当化する。イスラム教本

図 5.2 ウガンダにおける妻に対する暴力の原因



注: Observations of women in Nankulabwe Parish, Uganda. Focus Group: Sewakiryi, Buyenka, Bankus and Gitta, Uganda 1999.

ではこのような権利が許されている、と主張する男性もいれば、規則に従わない女性の性質を牽制しておくためには、暴力を振るうのは当然の手段であると説明する男性もいる(Schuler et al. 1998)。結婚して5年になる17歳の女性について、バングラデシュのPPAは次のように報告している。彼女の両親は結婚持参金として装飾品や家庭用品に4万タカ払った。しかしPPA調査の約1年半前、この女性が病気のために夕食を作っていなかったと知った夫は、彼女を家から締め出した。「夫は食事を用意していなかったことに対して彼女を怒鳴りつけ、暴行を加えた。夫の母親もこの虐待に加わり、そしてその夜まだ赤ん坊の子供を残したまま、この女性は親元に送り返されてしまった」(Bangladesh 1996)。夫は離婚の申し入れをするため、この女性が精神異常者だとする証明書を医師から入手しようとしているが、女性の両親が最も望んでいるのは、この夫が彼女を連れ帰ってくれることなのであった。

男性による支配や暴力は、女性が家庭の外で働いているか否かに関係なく、貧しい家庭に降りかかるものである。ネパールの地域社会の女性達からは、結婚持参金が主な問題として挙げられた。「持参金の額のせいで非常に多くの女性達が拷問を受け、負傷したり、亡くなったりした」という(Nepal 1999)。村々で実施されたグループ討論は、家庭内における女性の意思決定権の強さは、結婚時の持参金次第であると公然と認めた。「持参金の多い娘達は良い待遇を受け、少ない者は暴力を受けたり、或いは殺されてしまうこともある」(Nepal 1999)。

## 子供達：家の中でも外でも、彼らの立場は脆弱である

私にはミミー(15歳)とシャロン(17歳)という2人の孫がいます。シャロンの父親は懲役20年で服役中です。この子供達の母親はパテンシー近くの農場に住んでいますが、子供達の面倒を見ません。シャロンは14歳の時、柑橘類を扱う工場の事務員の男にレイプされました。彼女が妊娠を打ち明けてくるまで、私達はそのことを知りませんでした。その時シャロンは3年生でしたが、以来学校を辞め、妹と農場で働いています。シャロンの子供ヘンドリカは2歳になりますが、私のもとに残されたままです。シャロンは、子供の養育費を私に出すわけでもなく、週末に子供の顔を見に帰って来るだけなのです。私はその子がスワルツ家の一員である以上、面倒を見ることに合意しました。

—南アフリカで実施されたPPAの報告書より, South Africa 1995

家庭内での暴力は、子供達に直接的、間接的な影響を与えている。いくつかのPPAが、レイプや売春などの子供への身体的、性的虐待を報告している。南ア

リカでは、性的虐待を最も受けやすいのは、継父と暮らす少女だ、といくつかの証言が示唆している(South Africa 1998)。これは貧しい子供達に限ったことではないが、家庭内暴力に直面することに加え、貧しい家庭の子供達は家計を助けるために働かざるを得ないことが多く、そのため路上においても虐待の危険にさらされることになる。南アフリカのPPAによれば、「ストリートチルドレンのなかにも…ジェンダーによる違いが浸透している」。少年達は、窃盗や物乞いをし、少女達は売春を行う。「少女達がHIVや他の性感染症に感染する可能性が高いのに対し、少年達は暴行や虐待を受ける危険に直面する可能性が高いのである」(South Africa 1998)。

## 家庭崩壊

女性が家を去る際には、カゴ、調理用具、プレスレット、そして自分の衣類しか持ち出すことが許されていません。まれに男性が、その女性には助けが必要と判断し、その年の収穫の半分を与える場合があります。

—タンザニアで実施されたPPAの報告書より, Tanzania 1997

家庭崩壊は、男性と女性にそれぞれ異なった影響を与える。一般的に離婚となると、財産面での勝者は男性であり、敗者は女性である。離婚後に女性が受け取る財産は、男性のそれよりも価値が低い傾向にある。加えて、夫婦間の財産分配に関する法は適用されないことが非常に多く、女性は社会や家族のネットワークに頼って生活をやり直さなければならない。PPAは、しばしば離婚を女性の貧困を促す要因として報告している。

タンザニアのカゲラに住む女性は次のように述べている。「女性が価値のある物を所有することはできません。離婚や別居の際、女性は子供を引き取ることは出来ませんが、その子が7歳になると、夫に返さなければなりません。子供は父親のものなのです。女性に子供がいな場合は、嫁入りの時に持って行ったものしか返してもらえません」(Tanzania 1997)。タンガ地方の女性は、「離婚の争いがそれ程ひどいものではなく、特に家庭が裕福な場合には、ラジオやくわなどもう2、3品もらえることもあります」と述べた。キゴマ地方のカサンゲジに住む女性は、「この村の男性達には、その年の売上げを上げるために、収穫後に女性達を追い払い、その後彼女達を引き戻すという悪習があります」と述べた(Tanzania 1997)。

ケニア近隣の女性達は、別居や離婚をする際には自分の金で購入した物は持って出る、と報告している。家庭崩壊後に、家の中の金があるだけ持ち出す女性もいる。持ち出したことを後で問われても、証拠は無いので否定するのだとい

う。離婚時に乳児がいる場合は、乳離れするまでは女性が育て、その後は男性の元に返さなければならない。時には、女性が子供を引き取ることを決意することがあるが、子供は離婚後の女性の唯一の財産であるとみられているので、異議を申し立てられることは少ない(Kenya 1996)。トーゴでは「離婚は、家庭が外的衝撃に耐える力を低下させ、極貧に陥る主たる原因の1つとなっている」とされている(Togo 1996)。

経済的な理由から、離婚後も生活を共にする家族もある。モルドバでは、アルコール中毒や家庭内暴力が原因で離婚したにもかかわらず、双方とも家を出る金銭的余裕がないため、一緒に暮らし続けている男女もいる(Moldova 1997)。マケドニアの中心部に住むある家族は、女性が子供を連れて行く場所が他になかったため、離婚後も元夫の家で一緒に住み続けている(Macedonia 1998)。

報告によると、離婚の際に、夫から家庭維持費と子供の養育費を支払われることはほとんどない。南アフリカでは、離婚した夫から子供の養育費として20ランドを何とか出してもらったことができた女性は、後に夫の要求によってそのお金を返さなければならなかった(South Africa 1998)。ラトビアでは、元夫が養育に関心がなかったり、失業のため養育費を払えないなど、離婚後の女性達が置かれる状況は厳しい。ラトビアのリガに住むベニータは43才で、離婚後1人で2人の子供を育てている。離婚後の「不適切な財産分配」の結果、共有財産は全て夫が受け取ったが、元夫は子供に対して何の援助もしていないのである(Latvia 1998)。

ベニンでは、女性に子供の養育権を与えることを裁判所が決定したごくまれな場合を除いて、貴重な子供の労働力の恩恵を得るのは男性である。「離婚の際、元夫はたいい子供を含めた全ての物を持って行くが、妻方の親は継続して結婚費用を返済しなければならない。子供がまだとても幼い場合は、働くことの出来る年齢になるまで、つまり6歳から7歳になるまで子供は母親の元に残る。(少数の人々のみが利用できる)現代的な法廷では、子供の意見を尊重する傾向にあり、時として母親に養育権を与えたり、父親に家族扶養費を要求したりするものの、養育費が支払われるのはごく希で例外的なことである」(Benin 1994)。

残念ながら、離婚に伴う法律上の訴訟は、公平な財産の分配を保障するものではない。タンザニアでは、若くて比較的教養のある女性の中には、女性団体の支援の下、法廷での判決を求める者もいる。このような努力によって、一握りの訴訟においてではあるが、結婚をしていた間の財産を守ることができた場合もある。しかし、大部分の女性は法に訴えることを避ける。ある女性が説明するには「結論に至るまでの法律上の手続過程は面倒です。女性が権利を手に入れることが出来ない可能性もあります。男性は法的権利に関わっている全ての人に多額の金銭を与えて、必ず女性が負けるようお願いすることができるからです」(Tanzania

1997)。公の訴訟で恥をさらした場合や積極的に正義を主張しようとした場合、実家に帰ることは許されないのだと女性達は述べている(Tanzania 1997)。

## 協力

食費以外の出費はありません。それ以外のものは全て、男性とその妻の関係によって左右されます。

—マリのバマコの貧しい女性, Mali 1993

あなたのことを、お金がなければ生きていけない人だと知っていれば、結婚しなかった。昔はちゃんと愛し合っていたのに、今は喧嘩ばかり。

—マケドニアで実施されたPPAの報告書より, Macedonia 1998

もちろん、すべての家族が重圧によって崩壊していくというわけではない。ラトビアの調査員達は、貧困は次の2通りのうち、いずれかの形で家庭に影響を与えると結論づけた。「結束が自分達の経済的問題を乗り切っていく唯一の方法だと気づき、(時には離婚寸前の夫婦でさえ)家族が一体となる場合。もう1つは、日常的な財政問題から来るストレスが家庭を引き裂いてしまう場合で、過去に不和が生じた家族は特にこうなりやすい」(Latvia 1998)。

自分達のニーズを満たそうと、多くの家族が協力している。例えば、エクアドルのメンブリラルに住む農家には13人の子供がいるが、家族1人1人が力を合わせることで収入を得ている。「トマスの本業は農業だが、彼はいつも副収入を得ようと努力している。彼の主な収入源はコーヒーだが、生産量が低い上に、ここ3年間価格は下がったままである。今年、彼と息子のロバルトは、オリエンテの友達のところまで6週間働いた。カルメンは自らを主婦だと思っているが、毎年6月と7月には近くの農園でコーヒーを収穫する。今年3人の娘が彼女を手伝った」(Ecuador 1996a)。

「貧困から逃れる方法を見つけ出す」ために、家族は様々な方策を立て、共に暮らし続ける。家庭の収入を生み出すのに最も一般的な方法は、できるだけ多くの家族を働き手にすることである。次に挙げられているブラジルのある家族の話は、貧しさを乗り切るために、家族がどれ程の協力や調整を要求されるか、ということを表している。「この家族は夫(52歳)と妻(32歳)、そして8歳から13歳の5人の子供達で構成されており、夫は宝くじのチケット売りで駐車場の警備員という2つの仕事を持っている。妻は週38時間を家事に費やし、週35時間は洗濯屋や掃除屋、或いは近所の人達のマニキュアを塗るなどして家の外で働いていた。4人

の男の子達は学校に通っていた。上の子3人は駐車場でも働き、ちょっとした雑用をした。12歳になる女の子は学校へは通わなかったものの、家族が生きていく上でむしろ重要な役割を果たした。彼女は週40時間を家事に費やし、そのおかげで、母親が他の仕事をできるようになった。彼女はまた、家畜である鶏の世話を助け、さらに母親の有給の仕事も手伝ったのである」(Brazil 1995)。

総じて見てみると、多くの家庭において男性は重要な家族の収入源であるが、低賃金、雇用機会の減少、病気などによって、家族を貧困から抜け出させるのに十分な収入を稼ぎ出すことができないのである。南アフリカに住むある男性は、農場労働者として月250ランドの収入を得ている。PPAの報告によると、「この男性の収入は僅かなものです。彼は全ての稼ぎを妻に見せ、家に帰る交通費にも12ランドか24ランドしか使いません。酒も飲みません。良い夫なのですが、その金額では生活できません。だから私達は彼を助けるのです」(South Africa 1998)。

男性の中にも、生きていくためには協力が不可欠だという考えを持つ人は多い。南アフリカのイーストロンドンに住む移住労働者の男性は次のように述べた。「私達は、同じ区に住む他の男達とは違います。私達は家族を尊重しています。月末に給料を飲酒代に使ってしまったりはしません」(South Africa 1998)。

## 女性が世帯主になった家庭

私には、家も土地も何もありません。私達家族が夫に捨てられてしまったからです。

—ケニアで実施されたPPAの報告書により, Kenya 1997

家庭崩壊の結末の1つが、女性が世帯主となった家庭である。いくつかの地域において、女性が世帯主の家庭は、彼女達を階層からはずれた人間として扱う血縁関係者からの排斥に直面しており、それに加え、経済的に生き残るために日々戦っている。ガーナのPPAは「北部に浸透している父系家族制度の下では、女性が世帯主の家庭は、過度に社会から取り残される傾向にある」と報告している(Ghana 1995a)。

フォルブレが指摘しているように、女性が世帯主となっている家庭は、男性のそれよりも貧しくなりやすいということは広く認知されており(Folbre 1991: 89-90)、これはケニアのPPAを含む多くの報告により裏付けられているものである。「35の村で、女性が世帯主となっている家庭全てに地図上で印を付けてもらった。全体的に見て、調査地域の人口の25%が非常に貧しいと分類されたが、この集団の中で女性が世帯主となっている家庭の占める率(44%)は、男性が世帯主の家庭

(21%)の2倍以上であった。男性が世帯主の家庭の59%が貧しい、又は非常に貧しいと分類される一方で、女性が世帯主の家庭の80%がこれに当てはまった。また、女性が世帯主である家庭の方がより貧困であるという点は、あらゆる区域と、35の村全てに当てはまった」(Kenya 1996)。

同様に南アフリカのPPAも、「最も貧しい家庭の多くは、祖母或いはシングルマザーが家族全員の世話をし、女性が世帯主となっている家庭である。彼女達には、収入につながる地域活動に参加するための費用や時間に余裕がないため、結果としてそこから除外されてしまった」と報告している(South Africa 1995)。ナイジェリアの調査員はこう述べている。「ある分類にあてはまる人々、中でも女性が世帯主となっている家庭、その中でもまだ働くには幼すぎる子供がいる家庭は、特に立場が弱いと見られている。未亡人やシングルマザーは子供が病気になると特に困難に直面することになる。誰も進んで助けてくれないか、或いは助けることができなからである。また彼女達は農場で働く人手を欠いているが、金銭的に人を雇う余裕がない」(Nigeria 1995)。

女性世帯主の全家庭が必ずしも地域社会の中の貧しい、或いは最も貧しい部類に属するというわけではない。女性世帯主の家庭を助けるための様々な活動があり、彼女達がいかに貧しさを切り抜けられるかは、このような活動に左右される。女性のためのセーフティネットを慣習的に提供する文化もある。例えば、イスラム教社会では、ムスタヘキーン(*mustaheqeen*)という「稼ぎ頭の男性がいない家庭といった、家族からの支援がない未亡人など」に対する支援がこれに当たる(Pakistan 1993)。ムスタヘキーンは、「援助に値する者」と訳され、これに当てはまる者は、ザカト(*zakat*)という政府から貧しい人々に支払われる公的な税金を受けることが出来る。

女性が家庭を支えるにはいくつかの理由がある。例えば男性の移住、離婚、そして男性がいても経済的に家族を養うことができない場合などである。男性の移住が原因で女性が家庭を支えるのは、通常一定の期間だけであるが、時としてそれが長くなり、女性は自分と子供達だけでやりくりしていかなくてはならない状態に陥る場合もある。

離婚をした女性が世帯主になるという家庭も多くあり、彼らは貧困に対して特に脆弱である。夫は、元妻を1人取り残し、彼の社会的ネットワークを離婚と共に持って行ってしまう。それに加え、離婚をした女性には、概して住宅や食物を育てる畑など、基本的な生活基盤に対する制限がある。元夫や、彼の家族から支給される子供の養育費が不足している等、離婚をした女性の所得は限られている。彼女達は子育てや、低賃金で危険を伴う仕事への女性差別により、限られた仕事しかすることができない。また、離婚をした女性は、離婚をしたということで、文

化的に汚名を着せられてしまうことがある。特に、失業と女性が世帯主という組み合わせは、家族にとって有害である。リーブルビルに住む、失業中の若い独身の母親は次のように説明した。「私は、子供達にとって父親であり、母親でなくてはなりません。先のことはまったく予想もつきません。友達がいない場合は独りぼっちなのです。政府は若い母親が抱える問題に気づかず、気にもかけてくれません。政府が言うことといたら避妊のことだけなのです。それに、私達は常に危険にさらされた生活を送っています。女性が1人で住んでいることを地元のマフィアに知られたら、何をされるか分かりません」(Gabon 1997)。

1人暮らしをしている女性の身体的な脆弱性はPPAにおいてもいくつか証言されている。マリの田舎からきた女性は、夫に捨てられ、医療費を出すことができなかつたつらい経験を語った。「夫は10年前に家を出たまま戻って来ません。私に目の病がなければ、茂みにある野生の木の実を収穫することが出来るのに…目に痛みを伴い、よく見えない今、私は何をしたらいいのかも分かりません。兄弟に助けを求めても彼らも貧しいため、私を助ける余裕などありません。妹と母親は未亡人なので助けを求めることが出来ませんし、母親は高齢で半身不随なのです。女性団体に助けを求めても何もしてくれません」(Mali 1993)。

夫が家においても経済的に貢献できない場合、自分が一家を支えていると感じている女性もいる。このような場合、一家は妻と子供の収入の可能性に頼るしかない。結婚して6人の子供を持つ、あるエチオピアの女性は、自分の家族を含め男性を世帯主としながら、自分が家族の代表となることに懸念を示している。彼女はこう言う。「これらの家庭が夫を世帯主とする家庭だとしても、一家の稼ぎ手は女性なのです」。彼女の夫が失業したため、家族は貧しくなった。夫は肉屋から肉を仕入れ、それを売って収入を得ようとしているが、家族の主な収入源は、娘が販売するコロ[穀物の蒸し焼き]や、オレンジ、バナナなのである(Ethiopia 1998)。

最後に、多くの女性は夫が死亡した場合、自分が一家の世帯主となることを覚悟している。他の国々と同様、ナイジェリアでは未亡人に貧困はつきものである(Box 5.2参照)。

## 結論

ジェンダーの関係は、貧しい家庭において困難な変化の過程にある。この基本事実は、貧困削減戦略の中心に据えられるべきである。経済的に苦しい環境にいる場合でも、男性は劣悪な仕事に対して抵抗する者がほとんどであるのに対し、女性は比較的柔軟で、路上に出て、家庭崩壊を避けるためならどんなことでもする。多くの男性は、一家の稼ぎ手としての力を失うと、薬物やアルコール、家庭内

## Box 5.2 ナイジェリアの未亡人団体

多くのPPAの報告書は、未亡人の家庭が最も貧しく、貧しい者の中でも立場が弱い、と記している。しかしながら、ナイジェリアの未亡人団体の増加は、彼女達がお互いの悩みや財産を分かち合うことで良い結果を生み出すという効果を例示している。

「最も成功したのはアディクポの未亡人協会である。1986年に創設されたこの協会には350人のメンバーがいる。カトリックの宣教師がこの協会の設立に貢献した。協会の主な活動は、未亡人の子供に対し、教育や医療及び社会保障に関連した一般的な世話を提供することである。この協会は無駄な支出がなく、信頼できる組織である。アディクポの未亡人協会は柑橘類の果物畑や農地を持っており、これらが主な収入源となっている。また、協会は製粉機の取り付けも行い、そのおかげでとうもろこしをすり碎くという過酷な労働を無くし、さらなる収入を得ることとなった。1991年には、ベニュー州の最優秀女性団体賞を受賞した。しかしながら、インタビューをされた男性のなかには、この団体に反対する者もいる。夫の死後でも援助が見込めると分かると、女性は夫をおろそかにし、夫が死のうが生きようがかまわなくなる、と彼らは思っている。男性からの反対意見があるのにも拘わらず、この団体への加盟者は教会の支援によりますます増えている。もし慣習的な参加型組織が公的機関からの支援や協力を得ているならば、インフォーマルな参加型組織がその成果を最も得られるという、この活動の目標と一致する。」

出典：Nigeria 1995

暴力に走ったり、うつ病にかかり、家出をしたりする。他方、女性の場合、今までにはなかった自信を得るようになる。新たな経済的機会を通じて、たとえその機会がわずかなものだとしても、彼女達は家事の責任も果たした上で、自らを危険にさらしながらインフォーマルセクターで働くのである。家族同士が協力し合わなければ、いずれ家庭は崩壊してしまうだろう。

労働力の女性化や経済のインフォーマル化が「女性への経済的機会の向上よりもむしろ、男性の地位の低下」に反映していると捉えるスタンディング (Standing 1999) の結論は、PPAで何度も繰り返し報告されている。夫に続く稼ぎ手としての役割は、必ずしも女性の社会的権力の保持や、家庭内の平等や平和につながっていく訳ではない。南アフリカのPPAは、「女性の雇用がもたらすインパクトは多岐に渡る。家庭内の問題に対する裁量権が増した女性、男性抜きの家庭を築くことに成功した女性、また男性に資金的な援助を続ける女性もいる」と報告している (South Africa 1998)。パキスタンのPPAによれば、場合によっては、女性の雇用は必要悪と考えられており、繁栄への願いの中には、次の世代の女性達にはこうした必要性がなくなっているように、という思いが込められている (Pakistan 1996)。

同時に、新しい役割を担う機会を得ることで、力を得たと感じる女性もいる。「女性の経済的自立が急増し、特に家庭外の仕事において、彼女達の対応力や手腕が向上したと報告する女性もいる。例えば、ウガンダ中心部の農村部では、結婚費用に対する考え方に変化があらわれた。それに加え、最近では女性の態度や女性に対する態度が変わり、ジェンダーによる役割も変わりつつある、と特に都市部に住む若い女性が述べていた」 (Uganda 1998)。

女性、男性及び子供など家族全員が、新たなジェンダーによる役割と深く根付いたジェンダーの概念に適応する為に、多くの犠牲を払っているということが、調査により明らかになった。いくつかの例外を除き、国際開発機関は、男性と女性の幸せは相互に関連していると認識し、貧しい男性と女性の両方にアプローチする方法よりも、未だに「開発における女性」に焦点をあてる方法を用いている。女性を助けるためにはまた、男性の役割を理解し、男性に関与することが大切である。男性が依然として公共の場を独占しているため、制度・機構を変えるためには、彼らの参加が欠かせないのである。変革は、組織内で力のある男性と女性とが協力することでより実現し易くなる。そのような協力関係は、女性が組織して経済力を持ったときに、威力を発揮するだろう。

ここで、2つの基本的な問題が述べられなければならない。1つは経済で、2つめは社会の問題である。まず、貧しい男女に対して雇用機会、特に利益を挙げ易い自営業の場への参加機会を増やすことが必要である。しかし、これは汚職、貧しい人々による組織の不足、虐待された女性に対する支援の不足や、法の執行機関が崩壊している状況では実現しにくいだろう。

次に、家族を支援するためには、人としての価値を議論の対象とする変革を求め、また、そうした変革へと導くような社会的、精神的な援助が、女性にも男性にも必要である。そしてジェンダーの問題が引き起こす暴力に立ち向かうべきである。社会的に深く根付いた規範は、女性の低賃金労働参加が増加しても、自動的

には変化しないであろう。ジェンダーの関係は、全ての貧困削減戦略において本質部分に位置付けられるべき問題である。この点については、制度・機構の目的、構想、動機、そして調査や評価の結果を踏まえて成功とされる判定基準に反映されるべきである。貧しい女性達は、法的支援へのアクセスや、彼女達を攻撃せず保護してくれる警察の存在を求めている。ジェンダー政策の実施は、男女間の生活が結びついていることを示している。男女平等社会へ向けて、よりトラウマの少ない形で変革できるよう、ジェンダー問題の議論には男性、女性の両者を参加させるべきである。ジェンダーの本質やジェンダーの関係について、男女別、男女一緒にどちらのスタイルで話し合うのが適切か、またこれが、宗教上の指導者、NGO、政府、もしくは職場など、誰によってなされるべきかは、文化や状況によって異なる。ウガンダに在住する貧しい女性は言う。「男女が自分達の権利を主張するためには、男女が輪になって話し合わなければなりません。男性が参加しない限り何の解決にもなりません。また同じことが繰り返されるだけです」(Uganda 1998)。

## 事例研究5.1 ジェンダーと教育

PPAによると教育と家庭内のジェンダー問題は、読み書きの能力、学校への距離と交通手段、直接費用・間接費用、家族の安全保障、結婚、セクシャルハラスメント、及び虐待といった、6つの主な分野に分類することができる。全ての結果から言えることは、男子より女子の方が教育を受ける年数が少ない傾向があるということである(付録7 図5.4、図5.5参照)。

### 家庭内における読み書きの能力

必要な教科書全てを持って、学校に行きたい。

—ベトナムの子供、Vietnam 1999a

女性の識字率は男性に比べて低く、女性は読み書きができないために、公的な領域から取り残されている。そのため、女性の識字率の低さは、開発において重要な意味を持つのである。女性は教育プログラムに参加することが単に出来ないのだ。例えば、マリ女性は1日17時間働いているため、教育プログラムに参加する時間を確保することが難しい(Mali 1993)。インドのPPAによると、情報へのアクセスは読み書きの能力に大きく左右されるために、学校に通っている女子が男子の半分以下である地域では、情報の共有がなされていない。そのため、女性

は男性に比べ、政府が行うプログラムやサービスについての知識が乏しい。同様に、女性は土地の相続や所有に関する自らの権利についての知識も乏しいこととなるのである (India 1997a)。

## 距離と交通手段

[学校は] 昔と今では違います。

—ギニアビサウで実施されたPPAの報告書より, Guinea-Bissau 1994

クワメ・ランボルの家族には、19人の子供がいます。毎朝、1.5マイルの距離を歩いてガンバガJSS (*the Gambaga JSS*)という学校に通っています。クワメは朝食抜きで学校に行くこともあり、土手を渡らなければならないので、雨季には学校に通えなくなることもあります。

—ガーナで実施されたPPAの報告書より, Ghana 1995a

多くの場合、学校は子供にとって非常に遠い場所にあり、両親は、学校に通わせるために通学費を負担しなければならない。さらに、多くの地域において、女子は付き添いが同伴して移動することが義務付けられており、そうしなければ、社会規範を犯してしまうことになる。1人で行動する少女や女性に対するセクシャル・ハラスメントが、このようなジェンダー規範を一層強化しているのである。例えばパキスタンにおいて、「娘が通学中にからかわれたり、被害を受ける恐れが、子供に大人を付き添わせる余裕のない家庭にとって、(子供を通学させる) 制約となる」(Pakistan 1996)。

バングラデシュのPPAによると、教育問題が水不足の問題に次いで、最も優先課題とされている地域がある。母親達は、川や危険な丘陵地帯を越えて、家から遠く離れた場所にある学校まで子供を通学させることを懸念している。中でも、高校はさらに遠い場所にある (Bangladesh 1996)。パキスタンでは、通学距離の問題が教育費に続く重大な問題として挙げられている。例えば、文化的規範により、女子が長い道のりを1人で移動できないことが問題とされている。娘の学校まで付き添う母親もいるが、幼い子供がいる母親にとっては不可能である。調査を行ったある特定のグループから、「ラワルピンディ近くのスラム街に住む女性の間には、娘に対して高い教養を望む、前向きな声はある。しかし、女子中学校に通うためには、バスで3マイルと徒歩1マイルの距離を母親同伴で通わなければならない、通学には片道1時間半もかかると言われている」ことがわかった (Pakistan 1996)。

## 直接的・間接的な費用

私達は、年度内に教科書を終えたことがありません。しかし、依然として授業料は上がり続けています。

—ウガンダで実施されたPPAの報告書より, Uganda 1998

教育にかかる費用は、学校の授業料と子供の労働力を失うことによる損失を含んでいる。その上、家族はたびたび学校から賄賂や寄付金を求められる。これら全ての費用は多くの貧しい家庭の経済成長を著しく妨げる。この費用を考えた時、多くの場合、家族は女子よりも男子に教育を受けさせることを選ぶ。

子供に教育を受けさせたいと思っても、そうする余裕がない家族が多い。バングラデシュのPPAは、男性も女性も子供達の教育に協力的になってきていると報告しており、農村部の女性も教育を受けられるようにするべきだ、と主張している。これらの女性は、教育への賄賂をなくすこと、教科書や文房具の支給、入学金の値下げ、自由で融通のきく時間割、小麦の配給、遠隔地域の学校の増設などを提案している (Bangladesh 1996)。ザンビアでは、授業料を支払う季節が、不幸なことに食料の貯蔵が最も少ない時期と一致している (Zambia 1997)。スワジランドの女性は学校に支払うお金を捻出するため、常にストレスを感じている (Swaziland 1997)。「学校は全ての用具が揃わないと出席を許可してくれないのです。私はそれを用意することができませんでした。最初は制服でした。私は何とか子供達に制服を買い与えましたが、その次は他の勉強用具でした。これはとても悲しいことでした。私は学用品を買うために仕事を見つけるよう、子供達に言わなくてはならなかったのです」とブラジルのある女性は語っている (Brazil 1995)。

一方、授業料や学用品とは全く別に、貧しい家庭は子供達が学校に通っている間の労働力の損失という影響にも直面している。マリでは、学校教育が家庭生活の重荷であると主張した人はほとんどいなかったが、子供の労働力を失うことは非常に困るという意見が多くあった (Mali 1993)。女子の労働は特に家庭で役立つとよく言われており、そのことが女子生徒の入学率の低さに直接影響している。インドの女子は、家事労働に多くの時間を費やしており、女子が学校に通う妨げとなっている (India 1997a)。

ナイジェリアのある地域では、両親は政府による教育資金の再編に当惑している。彼らは効率的な教育資金の運用は政府に責任があるとしている。「政府は(学校を)台無しにした。政府は教師を支援するべきである。もしくは、学校を宣教師の手に戻すべきである…。これは政府がやるべきことである。この国には油田がたくさんあり、政府は私達の生活を改善しようともせず、毎日石油を大量に輸出し

ている」(Nigeria 1997)。

資源不足から、両親が子供達のうち何人かを辞めさせなければならない時、そのほとんどが女子である。パキスタンの多くの貧しい家庭は、娘に教育を受けさせているが、調査員が見る限り、男の兄弟の代わりに女子に教育を受けさせている家族はどこにもいなかった(Pakistan 1995)。その理由の1つとして、女子の労働が家庭において男子よりも価値があるためである。また、教育は将来安全な生活のための家族の「投資計画」でもあるからである。

## 家族の安全保障

裕福な女性になりたいです。

—ナイジェリアで実施されたPPAの報告書より, Nigeria 1997

PPAには、両親が将来の保障と子供の自立を求めていると頻繁に報告されており、これは当然のことながら教育に関する決定に影響を与えている。多くの場合、結婚と男女の収入の見込みの両方がこれらの決定要因となる。アルメニアの女子にとって教育は、素質のある妻という地位を与え、結婚持参金の代わりとしての役割も果たす。都市部の女性も、女子のより高い教育の必要性について言及している。「なぜなら彼女達には自立が必要だから…将来に備えてです」(Armenia 1996)。男子にとって、家族の保障と自身の自立は、自分が将来家族の収入源となることと関連している。ただし、そこにはより高レベルの教育が、高収入や雇用を約束するという相互関係に対する皮肉な見方がある。アルメニアのルサルピラルに住む、ある父親はこう説明している。「私にお金がないため、息子の専門学校での勉強を支援することができません。1年生でさえ必要だと分かる賄賂はもちろん、食事や交通費、寮費が必要です。これらの費用は一体何のためでしょうか。息子は1万ドラムの給料を稼ぐようになるのでしょうか。現在もう1人の息子は牛を飼育し、1日1万ドラム稼いでいます。教育が果たして将来を保障してくれるのでしょうか」(Armenia 1996)。

また両親は、娘を学校のような親類以外の男子と出会う公共の場に出すことが、評判を下げるのではないかと恐れている。パキスタンのPPAによれば、学校へ通うことで、(読み書きができないかもしれない)親戚を娘の夫にするという両親の選択を、娘が一層拒むようになる可能性もある(Pakistan 1996)。さらに、貧しい人々多くは、学校にいる女子達は結婚前に妊娠するだろうと考えている。マリの貧しい人々は「夫以外の子供を妊娠した少女達は結婚の機会を失う危機にさらされており、学校からも追い出される」と言う(Mali 1993)。両親は学校との対立を避け

るため、娘を家に置いておくことを好むのである。

子供達自身が学校よりも働くことを好む場合もあり、そのような子供達は戦略的な将来設計を描いている。男女混合の子供達で構成された調査対象グループにいたナイジェリアの2人の女子は、結婚する時のためにお金を貯めておく必要性から、学校に行くよりも行商(インフォーマルな販売活動)をして働く方がいいと主張している。「私達は裕福な女性になりたいのです」と彼女達は言う。7歳と9歳の学校へ行ったことがない少年達は北西部の農場で働いており、自分達が多くのことを失っているとは思っていない。「両親は農民で、私達を学校へ通わせることを必要だとは思っていませんでした。農業は生涯の生計を立てる手段となり、とても良い職業です」(Nigeria 1997)。

## 結婚

私の兄は小学校を卒業し、専門学校へ進学しました。私はいつか結婚するのを楽しみにしています。

—ナイジェリアで実施されたPPAの報告書より, Nigeria 1996

いつかは結婚し、他の家庭に入ってしまう女子を教育するのは、お金の無駄です。

—南アフリカで実施されたPPAの報告書より, South Africa 1998

トーゴやナイジェリアのように、結婚後の夫の家族の世話を嫁に任せるという結婚制度のため、家族が女子や若い女性を教育することを思いとどまってしまう国がある。これは、両親が娘の教育によって他の家族に投資しているようなもので、お金の無駄だと考えているからである(Togo 1996; Nigeria 1997)。パキスタンでも言われているように、「娘は『他人の財産』となる運命なのである」(Pakistan 1996)。

バングラデシュで報告されているように、娘を教育することで、実際に高い持参金を要求されることになり得る社会もある。「クステアのレフエイプールの人々は、どのように持参金の金額を査定するのか、私達に教えてくれた。教育を受けた無職の女子は1番高い持参金を請求される。それは、男子が女子より高い教育を受けているべきだという社会的規範があり、また、男子が自分よりも高い教育を受けた女子と結婚したがるためである。反対に、教育を受け、職も持っている女子の持参金は1番低い。教育を受けておらず無職の女子には、先に述べた2つの中間の額の持参金が要求される」(Bangladesh 1996)。家族の視点から見

ると、たとえ娘が裕福になるという将来性があるとしても、彼女を教育することは彼らの利益にはならないのである。娘が家にいて、役に立つ家事の仕方を身に付けた方が、持参金の金額を減らすことができるのである。

最後に、PPAは教育の制度・機構が、青年期の妊娠や結婚の習慣に適應していないと頻繁に言及している。ウガンダや南アフリカなどアフリカのPPAの多くにおいて、女子や若い女性は、妊娠した時点で退学すると報告されている(Uganda 1998; South Africa 1998)。妊娠したために、家から追い出される若い女性もいるのである。

## セクシャルハラスメントと虐待

私は学校が好きではありませんでした。学校には騒ぎを起こす人や、私を嫌って殴る先生がいたからです。

—エルサルバドルで実施されたPPAの報告書より、El Salvador 1995

若い人々、その大部分を占める女子は、学校での男性教諭や他の生徒による虐待やセクシャルハラスメントについて言及している。教育委員会はこれらの問題に対して余り反応を示さないか、もしくは無反応である。

PPAの報告によると、女子教育にとってセクシャルハラスメントは障害となっている。例えばパキスタンでは、「事実、全ての両親は子供達の読み書き能力を強く望んでいる。しかし、学校への入学者数、特に女子の数は、教育を受けさせたいという要望の大きさの割には、依然少ない。また、両親は娘が被るであろう嫌がらせや、男子と一緒に学校へ行くことによる評判の低下に対する不安について述べている。出席率の低さや、教師の管理能力の乏しさ、クラスでの暴力は、これらの危険を一層悪化させることとなる。奨励金が支給され、教師の能力や女子の安全確保に関する問題が処理されれば、入学者数は増えるであろう」(Pakistan 1996)。ナイジェリアでは、女性教師を都市部に偏って配置させたため、農村部の(女性教師が少なくなり)女生徒の出席率に影響を与えたことが分かっている(Nigeria 1997)。

ウガンダの女子生徒は、男子生徒による嫌がらせや「お金や洋服と引き換えに男性から早期の性交を求められる」ことへの恐怖感のために、男子生徒よりも高い割合で学校を辞めていく(Uganda 1998)。南アフリカでは、セクシャルハラスメントは妊娠と共に女子の教育の継続を阻む原因として報告されている(South Africa 1998)。マケドニアの村に住む少女は次のように述べている。「私は毎日バスで通わなくてはならなかったので、ストルガにある中学校へ通うことをやめまし

た。男の子達は私をからかうし、村の人々は『あの子を見てごらん、1人きりでバスやバンに乗っているよ』、と私のことを噂するのです。それが私の学校へ行きたくなくなった理由です」(Macedonia 1998)。

子供達は、学校に安全性がないため、学校へ行くのを辞めようと自ら決心することがある。例えばパキスタンでは、両親は子供達自身に通学の意味が無いことに次いで、費用の負担が主な障害だとしている。「[両親は]全ての費用を払うことができ、子供が学校に行きたいと思っているのなら、子供を入学させるだろう。調査した4家庭は、彼らの子供のうち1人又はそれ以上が学校を嫌い、通学を拒んだと話している。その子供達とは、教師に殴られた少女と、『意地悪な男子達』から嫌がらせを受けた姉妹だった」(Pakistan 1996)。

教師や学校職員が生徒を虐待した場合でも、地域社会が彼らを解任させることは困難である。エルサルバドルでは、ある男性教師が女子生徒達を虐待した。しかし、その教師は正式に任命された教師であったために、解雇されなかった。その女子生徒達は、数年間学校から追い出された。こうした出来事から、現在では、この地域社会は教育委員会を運営し、女性教員のみを雇っている(El Salvador 1997)。

## 事例研究5.2 ジェンダーと所有権

たとえ女性が両親から鶏やヤギを与えられたとしても、彼女がそれを所有することはできません。それは彼女の夫のものだからです。妻が一生懸命働いて鶏を手に入れ、たとえそれが卵を産んだとしても、それも夫のものなのです。

—ウガンダで実施されたPPAの報告書より, Uganda 1998

所有権や財産の分配は、家庭内におけるジェンダーの関係に影響を及ぼす。地域によっては、女性や子供達自体が財産としてみなされており、彼女達の人生は結婚や労働によって規制されている。また別の地域では、女性が管理する資産はわずかで、その資産を相続できるという保障もほとんどない。資産を入手する手立てがないため、貧しい女性は周囲の環境に一層依存するようになり、共同の資源を減少させている。本事例研究では、これらの問題を探っていく。

### 所有物としての女性

男性は結婚生活の中で女性をレイプをしているようなものです。男性は結婚持参金を支払うということは妻を買うということであると

思っているので、いつもいいかげんに妻を扱います。しかし、それについて語る人はいません。

—ウガンダで実施されたPPAの報告書より, Uganda 1998

女性はよく、合法的に男性家族の所有物としてみなされている。例えばトーゴでは、女性は何も相続できないのに「妻が死んだ夫の兄弟と結婚するというレビレト婚の風習により、女性の義理の兄弟が、その女性に加えて、(子供を含む)亡くなった夫の財産の全てを所有することができる」という。子供も財産として扱われることが多く、特に女子は婚姻交渉の際に、そのように扱われることが多い。パキスタンでは、男性中心の財産相続制度と居住様式により、女性は結婚後、夫及びその家族と一緒に暮らすこと、そして子供達や彼女の労働による利益もその家族のものとするを強いられる(Pakistan 1996)。タンザニアでは、離婚に伴う所有権に関し、男性が結婚資金を払ったことで女性を所有すると考えられているため、妻の労働から生じたものや、2人の間にできた子供はすべて、男性の所有物と考えられている。ウガンダでは結婚資金の支払いによって、夫による妻の所有の度合いがより強化されるが、結婚資金が労働力を失う女性の家族に対する穴埋めであると考えられている北部では、特にその傾向が強い。婚姻関係において男性が女性を自己の財産として所有することが、夫婦間レイプを正当化しているのである(Uganda 1998)。

少女や若い女性は、国境を越えて売買される「資産」として扱われ、特に弱い立場にある。グルジアのマルネウリで、16歳の女の子が家事をしている時にレイプされ、その後男の子を出産した。母親はこの不名誉を隠し、また家庭の切迫した物質的貧しさを改善するために、娘を5000ルーブルで売ってしまった(Georgia 1997)。

## 家、土地、そして遺産の保障

息子のいない女性は、土地を得るのに夫や男性の親類を頼らなくてはなりません。

—ナイジェリアで実施されたPPAの報告書より, Nigeria 1996

インドのPPAによれば、女性の読み書き能力が低いいため、法律或いは規定の存在を認識しておらず、自分達の土地所有権や土地相続権を認知していない場合が多い(India 1997a)。バングラデシュのハサザリに住む貧しい女性達は、最大の問題は土地や家、農場にどうアクセスするかということだと述べている。「女性は、家や土地、抵当の取り決めや他人の土地に居住しているということなどで、精神

的に不安定になり、身体的にも苦しんでいる。資本を借り入れるにも土地や家を持っていないと難しく、資本自体も乏しく高価なため、そう簡単には貸してはもらえないのである」(Bangladesh 1996)。<sup>9</sup>

調査した多くの地域で、女性は、財産の相続ができないということが明らかになった。ウガンダで、相続が男性によってのみなされるのは、女性に力や権限、婚姻に関する意思決定権がないことと明らかに関係している(Uganda 1998)。スワジランドでは、相続財産は男性によって受け継がれ、女性の所有権は認められず、したがって女性が土地を持つためには男性に頼らざるを得ない。

ケニアでは、女性は土地相続の慣習に2度、苦しめられることになる。まず、実の家族の土地相続の際、女性は差別を受けることが多い。貧しい家庭は土地の大半を息子に与えるからである。そしてさらに、女性が夫を捨てたのであれ、男性が妻を捨てたのであれ、土地の所有権は男性の下に残る。夫が死んでも夫の親類に土地所有の権利が与えられ、未亡人にはわずかな耕作と収穫の権利が与えられるだけである。ブシア地方のエルグル村などには、未亡人の土地相続に関する体験談が多く存在する。男性達、「夫が死んだ時に夫婦の間に子供がいれば、家の財産は全て彼女のものになる」と言う。しかし、女性達の話はそれとは異なり、「義理の兄弟達が…価値のある財産は全て持って行ってしまい、未亡人にはかろうじて新しく生活をやり直せるくらいの物が与えられるだけだ」と言うのである(Kenya 1997)。

スワジランドのルボンボ州に住む女性達は、自分達が直面している婚姻関係における土地の割り当てに関する苦しみを訴える。「『妻の数のわりに土地は非常に少ない』ため、もしある妻が、夫に気に入られずに放ったらかしにされていたとしたら、その妻が土地の使用権を得るのは難しいだろう。女性の場合、たとえ世帯主であったとしても、その使用権を行使するには、年下の者や息子などの男性の親類を通じて行なわれる。万が一男性の親類がいない、或いは男性の親類がこの様な問題に無関心な場合には、女性の要求は無視されてしまっていた」(Swaziland 1997)。

ナイジェリアでは、息子のいない女性が土地を持つには、夫や男性の親類を頼らなければならない(Nigeria 1996)。子供が産めない女性は非難され、軽蔑される。娘しかいない母親は、夫になおざりにされて苦しみ、夫の親戚の反目に遭い、そして夫の財産を得る手立てもなくなる。夫は息子を授かるために、第2、第3の女性を妻として娶るかもしれないのである(Nigeria 1996)。

南アフリカでは土地借用及び土地保有(部族の共有地分配)制度が作られたが、男性のみにしか権利保有者として認められていないため、女性が土地を手に入れる権利がより不確実なものになってきている。これは女性の食糧供給への不安定

さを増大させることとなる。女性達は、次のような代替案を示した。「ほとんどの男性は都市部へ出てしまうのだから、自分達に、家族の一員として決断を下すことができる代理人としての権限を与えるような仕組みを、女性は持つべきである」(South Africa 1998)。ザンビアでは、土地利用に関する法律上の制約は存在しないにも関わらず、女性が土地当局から土地所有権を得るのは難しい。法制度の下であっても、地域によって、既婚の女性は土地を得るために夫の同意を証明するものを提出せねばならず、また未婚女性について、子供がいない場合は土地の割り当ては推奨されないことが多い。ザンビアのPPA回答者は、長期の土地占有権及び使用権が世帯主によって家族に分配されるという、伝統的土地保有制度をPPAの中で提案している。回答者達はまた、土地改革や土地所有権の設定が、主として富裕な人々や政治的にコネのある人々に利益をもたらすことを恐れており(Zambia 1997)、計画に着手する前に、常に適切な協議がなされることを強く求めている。「ザンビアに適した土地所有政策についてはかなりの議論がなされている。昔から受け継がれた土地に、正式な土地所有制度を確立することによって、農村部の貧しい人々が苦しむのではないかとの恐れがある…というのも彼らにとっての土地は、唯一確保された生産的資源だからである」(Zambia 1997)。

## その他の財産に対する権限

豚は女性にとっての牛なのです。

—スワジランドで実施されたPPAの報告書より, Swaziland 1997

これまで論議されてきたように、調査を行ったほとんどの国の女性は、土地や家、また自分の子供といった財産を平等に持つことができずにいる。スワジランドのロウベルド州に住む女性達は、男性に牛の所有権を与えることは、女性や子供のためにならないと指摘している。男性は家族に相談することもなく牛を売却することができ、そのお金が家庭に利益をもたらすとも限らないからである。これは結婚持参金として女性が連れてきた牛に関しても同様のことが言える。女性の財産はほとんど無いのである。「家事の道具と伝統的な民族衣装以外に、女性が所有できるのは鶏のみであった。ヤギやロバ、又は牛を所有できる者はいなかった。ロウベルド州の女性達の中には、女性は豚を使った耕作に従事しているので、豚に関する取り決めについてはより発言権があると報告する者もいた。豚は女性にとっての牛なのである。鶏については殺すことも売ることも女性が自由に決めることができるが、それでも彼女達は通常、男性に相談をするのである」(Swaziland 1997)。

## 環境と共有財産

町で売るために薪を集める女性もいれば、木炭に加工する木を切りに山奥深く入っていく女性もいます。また、1束0.5~1ペソで売れるコゴン草を摘みに行く人もいます。これらの仕事で稼げるのは通常1日に3ペソ、塩を少し買うのにやっと十分な程度です。

—フィリピンで実施されたPPAの報告書より、Philippines 1999

共有財産の減少や喪失は、貧しい家庭にとって大きな問題である。深刻な水不足は男女に関わらず問題だが、女性への影響は特に痛烈である。ほぼ全ての文化において、水汲みは女性の役割であるからである。また、森林破壊も女性に同様の影響を及ぼす。なぜなら通常、女性達が薪の採集や家庭用の木材以外の森林資源に対しての責任を負っているからである。

インドでは(India 1997b)、葉の皿を作るのに使うレンガル(葉っぱの1種)などの非木材資源を採集しているのは、主に女性である。「非木材資源は元来あまりお金にならないので、多くの村人、特に男性が森林資源の採集をやめ、賃金労働へと移っていく傾向にある。そして実際、葉の採集及び皿の製作をするのに余計な労力を費やさなければならない女性に、さらなる負担を与えている。これに加え、多くの危険要素があり、特に保有林で森林資源を採集する際、役人による嫌がらせが顕著に見られる。多額の罰金や過酷な刑罰があるため、燃料用木材の採集はより危険な仕事であるように見受けられる」(India 1997b)。

スワジランドでは、女性に対する干ばつの影響が特に厳しい。「なぜなら女性は水汲みのためにさらに遠くまで歩かなくてはならず、また食料を入手するために、毎日何時間も費やさなくてはならないからである。多くの女性は時間があると、インフォーマルセクターでの行商や、販売用の手工業製品を作ることに従事している。特に後者は、冬の収入として欠かせないものなのである。しかし、干ばつによって女性が手工業に使っている草が激減し、草を刈るという出来高制の仕事さえも不安定となり、当てにならなくなっている。例えば、ロウベルド州のマピリングに住む女性は、寝具のマットを作るのに必要な草を採集するために、冬と春の間はマルカーズまでの距離を移動している」(Swaziland 1997)。生きていくために、女性は季節ごとの綿の摘集、野菜やアロエの苗を収穫して販売する仕事にも従事している。

## 注記

1. “household”(家計)と“family”(家族)という用語は、この章において区別なく使用さ

れている。

2. ジェンダーの関係は社会集団によって異なる。議会への参加や女性の経済的権利におけるジェンダーの差についての総計は、付録7の表5.3を参照。

3. 開発機関におけるジェンダー政策の発展の歴史については、Moser et al.を参照。

4. WHO (世界保健機関)が、1990～1997年にかけて世界中で行った17の主要な調査研究を分析してみると、調査対象の女性のうち、20～50%の女性は親しい男性による身体的な虐待があったと報告している(WHO 1997)。家庭内暴力が減少している、増加している、又は変わらないなど、様々なデータがあるが、いくつかの研究は、婚期の長さに伴う虐待の増加を示している。例えば、インドのグジャラート州の農村部では、言葉による虐待を報告しているのは、15年以上結婚している女性では85%なのに対し、新婚女性では53%である(Visaria 1999)。

5. 例えば、女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約(CEDAW)では、3つの条文が女性への暴力について言及しているが、はっきりとそれが問題であるとは規定していない。

6. 途上国における女性の活動については、(Ray and Kortweg 1999)を参照。

7. 最近の調査によると、インフォーマルセクターはラテンアメリカのGDPの50%、アジアの40～60%、そしてアフリカの75%を占めている。家族にとってインフォーマルセクターの活動は、重要な収入源なのである。例えばアフリカでは、インフォーマルセクターから得た収入は、農村部の非農業収入のおよそ25%、総収入の30%、そして都市部の総収入の40%以上になる。その上、女性の賃金労働のほとんどが公式な統計に含まれていないため、インフォーマルセクターの規模は公式な統計が示すよりも大きい。

8. ケベレ(Kebele)は政府行政機関の最下部組織、又は、地域社会を意味する。ケベレは地理的な区域とそこを管理する委員会の両方を指す。

9. この問題を解決するため、グラミン銀行は女性への住宅ローンプログラムを始めた。(Narayan and Shah 2000)を参照。